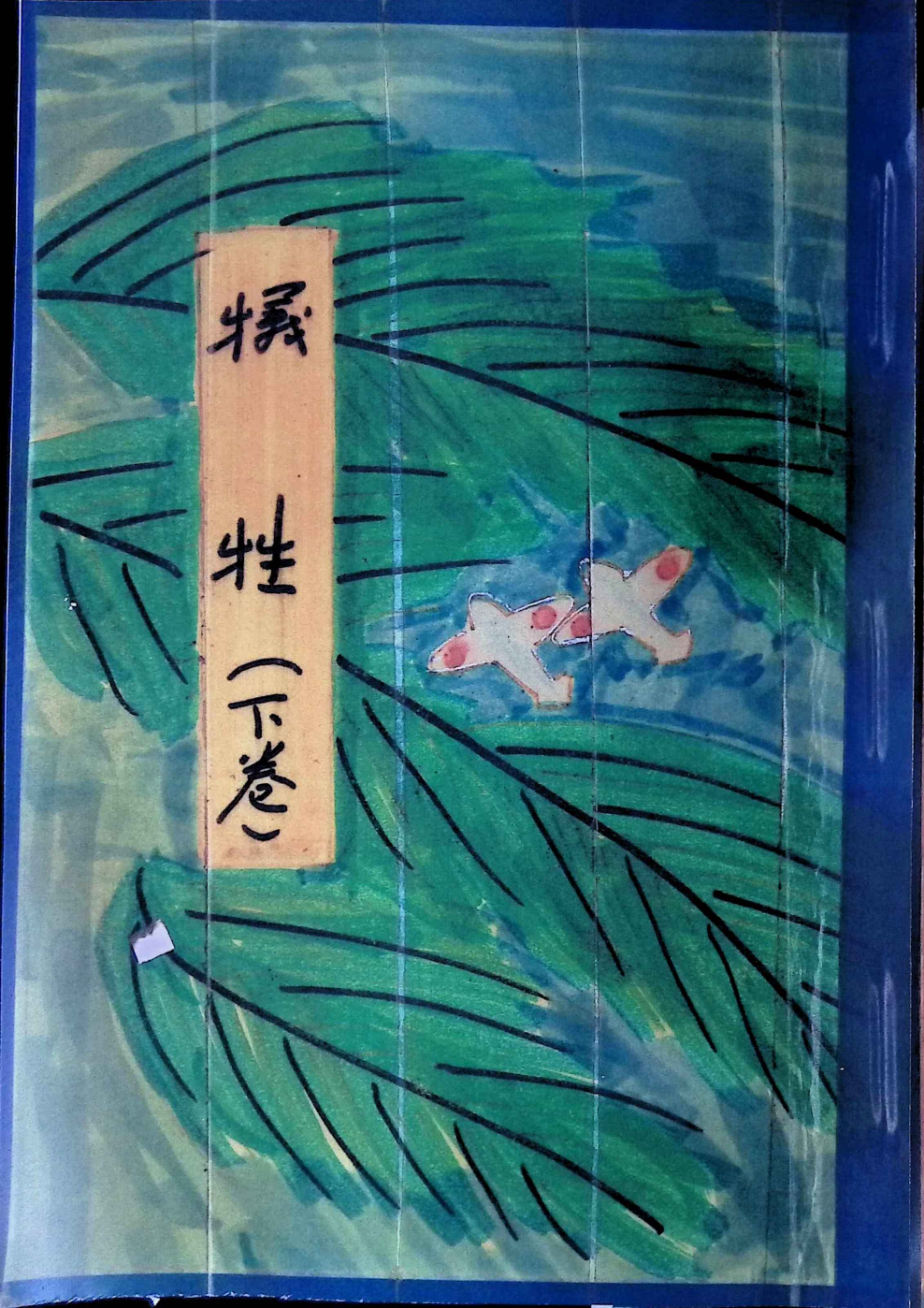


犠牲（下）

里見高義

一一	連合軍上陸	二〇三
一三	訣別	二〇九
一四	野戦病院の夢	二一六
一五	隊長の死	二五〇
一六	身代わり	二六八
一七	患者輸送隊	二八六
一八	孤独	二九七
一九	脱出	三〇八
二〇	悪魔	三二九
二一	桜会地	三五九
二二	カマリスク	三六五
二三	分散問題	三七八
二四	アダルファスの花	三八五
二五	国崩る	四〇五
二六	そのあと	四一六

上巻の梗概

昭和十九年五月、勇躍壮途についた第百三師団工兵隊第十中隊、通称・威一〇六七九部隊島本隊・は、北緯〇度ネグロス島西ネグロス州バコロド市で新しい年を迎えた。その日、祖国に妻子をもつ中岡忠義は終戦を予言しながら鬼籍の人となってしまう。彼の遺体を受領しての帰途今年はきっと嫌な年になりそうだと、全身に悪寒を感じる。中岡の死は、軍医とわたしとの協議による安楽死に該当する事件であることは誰知る由もなかった。

その後の日本軍はおのおのの島々で苦戦し、惨めな敗戦の悲報はつぎつぎと伝わって来ていた。

このネグロス島でさえ、一帯の空襲は激烈をかえ、日を経過するごとに、友軍の投下は爆破されていく。

レイテ島へ救援部隊と兵器弾薬を輸送したあとは、米

空軍に抵抗する術さえなく、ただ逃げ惑う以外にとるべき途はなかった。バコロド、シライ、タリサイ、ナガなど、島内あちこちに設けられた友軍飛行基地も、連日連夜にわたる空襲によって徹底に粉砕されたが、わたしたち工兵隊は海辺の拠点を離れ、台地に出て高原を切り拓き橋梁敷設、道路補修の作業に疲れている。

イニバン河畔に屯していた中隊主力は、二本柳木を経て太郎山麓に通じる道路を開通させたが、その翌日、中隊は棲み馴れた街を、平地を、高原を去って、また、すべての思いさえ入振り切って、高く聳える太郎山の向う麓の岩影に移って行くことになった。

けれども、軍医なき中隊付衛生下士官であるわたしは少数の勤務者とともに、エスメラルダ、オノ地区に残らねばならなかった。

二三 連合軍上陸

患者をあずかってエスメラルダに残っているわたしの所へ、先発していた小隊から担架が運ばれてきた。井上分隊の藤川一等兵なのだ。作業中、下腹部に激痛があり その痛みはなお止まらない。発熱し吐気もあるから最寄り部隊の軍医に受診したところ、急性虫様突起炎ということで入院を命ぜられたとのこと。

輸送車すると眼は充血し、舌には白苔が生じている。脈膊九十三至。ランツ氏圧痛にも苦痛がある。薬剤を与えなければわたしは考える。どうしよう。溜息が洩れて出るのだった。

藤川は、かつて内科疾患でわたしの手にかかったことはなかった。味代木のように落ちつきを見せるかも知れない。しかし、他部隊の軍医から入院の宣告を受けてい

藤川一等兵

るのだ。あのギンバラオンでのいく泉のように独断で前を張るのは止そう。一刻も迅く入院させるべきだ。急ぐ患者を車上にし、その動揺を精一杯気使いながら、わたしたちは、バコロドに到着した。

もう日没であった。ふた月暮しもなれば、人の運びも足繁く、雑踏が不快をさえ感わせる街であるのに、この夕は往来に人影さえなく、あの風流屋のかなでるギターの調べもそこにはない。ゴーストタウンなのだ。

異様な怪物に対峙して身構えているかの緊張と不気味さが漂っているのだ。この様相を裏書きするかのように沖合いには連合軍の巨艦の出没が伝えられていた。

もしやと不安に捉われながら訪ねて行ったバコロド患者療養所は、すでに薬抜けの殻・猫の子一匹さえいない。辛うじて発見した住民の話では、行く先は分らないが、

とにかく前日の午後から、トラックを連ね、患者や勤務者そして医療具などを輸送した模様である。

勝りは入院させることが出来ない。打ち拉がれた意図が頭の中で空転するか、このように必要すぎるか。入院は諦める決意がつくと旅団軍医部の井上書長の顔が浮かんでくる。

彼に相談して器具を借り、手術をするより外はない。石渡工場の角を曲ると、我々の以前に住んでいた兵舎だ。もう久しく空き家になっている。元角田分隊の部屋に勝りを寝かせ、その足で軍医部を訪ねてみた。しかし隊医校もすでに持ち出した後だった。最後の頼の綱も切れると、わたしの体に心労の疲れが一度におそってくるのだった。万事休すだ。わたしは悄然として勝りのいる部屋へ入って行った。

小松 忠臣　安芸 井口村出身 20.6.15.頃 天神山にて死せるものと考えらる 脚気兼栄失.
香西 嘉太郎　20.6.25. 脚気兼栄養失調症にて死す.
梶原 恭男　20.6.29 脚気兼栄養失調症にて死す.
賀川 周次郎　20.4.14 一息台にて肩胛間部盲貫砲弾破片創にて ネグロス島FL入院 20.5.18 散華.

と、どうだろう。下腹部の凝りも治まり、フルスもかなり好転しているのだ。

「藤川、調子がよくなっているぞ。わたしは安堵の胸を撫でおろした。翌日も異状は起こらなかった。私は、こんな患者を按摩法をもって快癒させた経験を二件ほど持っている。

付添いの香西一等兵は午後から、わたしの襦袢を借りて街へ出て行った。その香西のいないとき、藤川は、

「班長殿、腹がへって保てんです。まだ駄目ですか。」

と、空腹を訴えるのだった。

「もう少し頑張れ、俺にも考えがある、都合で夜七時になれば糅食を作らせよう。」

藤川は嬉しそうに笑顔を作って納得したが、恐らく手術器械は手に入るまい。その可能性は極めて稀薄だった。

夕方、藤川の願いを入れて、彼にも食事を与えることにした。彼の患者食が終って、しばらくしたころ、突如して耳をつんざく轟音が鳴り渡った。窓をゆすって断続する音響が、不安と戦慄を漂わせた。時折り窓に稲妻のような閃光が駈けまわっている。息詰まる沈黙がしばらくつづく。

「何ですか。爆弾ではないですか。」

藤川が最も怖れている。無理もない。体の調子が悪いのだから。

「あれは、どうも艦砲射撃だ、沖の方から撃ち出しているだろう。しかし、そうだとすると、一両日中の上陸作戦か。藤川、元気になってくれよ。」

わたしは藤川に憐憫の情を寄せた。階段を下りると長田軍曹が髭だらけの顔をして佇っていた。

「弱りましたねえ、艦砲射撃でしょう。」と云いながら彼の顔をもう一度見ると、

「うん、そうらしい。しかし患者はどうする。」と云う。

「今のところ、入院も手術も出来ません。しかし、昨夜マッサージをかなりしたのかよかったのか、大分落ちつきました。ここしばらくは元へ戻るか、いずれ、いつかは、ぶり返すこともあろうから、この際思い切って、切開しておけばいいですが、まあ、その時はその時のこととしておきましょう。」

南国の情緒をつんざいて、海岸線一帯に、砲の烈しい炸裂が続く。やがて、没発するであろう交戦への緊迫をいやが上にも高めていくのだった。

その夜、長田軍曹のすすめもあって、わたしたちは、止むなくエスメラルダまで引き揚げていった。

高原から見おろすバコロド付近の海岸線一帯には、無数の曳光弾が真昼を欺くばかりの輝やきを放っていた。

彼等、米英連合軍は、すばらしく優秀な武器、装備をもって、その夜半、ほとんど無血に等しいネグロス上陸作戦を完了したのである。

一三 訣別

バコロドとエスメラルダ、双方の残留隊が、それぞれの地区を捨てて、太郎山の裏、天竜川畔にいるはずの中隊主力を追って行った翌日、三月二十八日、連合軍上陸の報は、誰からともなく伝えられていった。

成規アメリカ軍、ならびにオーストラリア軍は、巨大な戦車を陣頭に配し、誇るべき化学兵器を使い、威武堂々、バゴならびにバコロドに至る地区に、すざましい進撃を開始した模様である。しかし、日本軍はすでに、空

東条貞男　徳島市寺町本町出身
20.4.2 Vister Alegre にて交戦中 右肩頭
右腋窩貫席機関銃創にて戦友と共に死す。

軍も地上火器もなく、抵抗に事かくのは必至であった。

このとき、東条貞男伍長以下七名がバゴ地区警備と橋梁破壊の任を以て派遣されていたのである。安否を気づかうのは、中隊長にも増して衛生部員のわたしであったかも知れない。

やがて、ネグロス島の山野を揺って、本格的な艦砲射撃が開始された。

迫撃砲、野砲、重砲、戦車砲等の集中打が加わり、もう過去七か月間一日の暇もみせず攻撃を続けている空軍の銃爆撃が之を指揮、援護するのだ。

ついにギンバラオンを奪取して迫ってくる戦車とブルドーザは、ついそこのサンファン道に轟音を上げ、この天襲川渓谷にこだましてくる。殺戮者どもは、もうそこまで来ているのだ。

こうした折り、島本隊は、エスメラダよりする糧秣輸送を続けていた。この作業はもちろん空襲を避けての夜間輸送である。

太郎山の麓、二本椰子には硝煙が渦巻き、眺めやる海ビサヤ海には、そこに遊戯する敵艦船の信号灯が明滅していた。鳴り渡る砲の音はすざましい。友軍の貨物集積所が炎上しているのがギンバラオンの火が高く、アポ周辺も俯瞰される。生臭い硝煙の香を衝いて、わたしたち一行は、カラバオ(水牛)の牽く荷車の轍の軌みにわびしさを感じながら、エスメラルダへ、エスメラルダへと下っていくのだった。

疲労と睡魔、そして空腹に耐えながら、カラバオに鞭打って、二本椰子まで辿りついたのは翌四月六日午前九時であった。

誰かに貰った煙草に火を点けると、程遠い海辺から、広漠と打ち続くマイス畑を渡り抜けてきた風に揺り動かされて消えてしまう。そんな紫の煙の流れが異様にわたしの心を捉えるのはどうしてだろう。

右手のギンバラオン付近には数条の火の手が上っていた。あの蛍の大群も、群れを崩して難を避けているだろうか。

臨終に傷いた人のせへ、「生」に関するテーマを掲げて空虚を放心の闇の夜へ、描きつづけていたあのネオンサイン・やがてはあの蛍の光も、わたしには永劫に見られないまぼろしの色彩になってしまうかも知れない。

頭上には、コバルトの空、そこにかかった白雲が絡み合っていた。はるかにへだてたうるさとの人を憶い春のおぼろ夜の蛙の声と、桜の花を想い浮かべていた。

と、その時、わたしは余りに大きい衝撃のため愕然として眼を瞠らなければならなかった。

その小径の向こうから、斬込み敢行の任務を帯びて、校庭へ赴く古内小隊以下一個小隊の出動に出合ったのだ。愛刀を確と握りしめ、黙々と歩を急ぐ古内小隊長の背後に続く下士官、そして兵士たち。中隊最初の斬り込み隊の出陣である。それは、グラナダおよびコンセプシヨンへまで進攻しているといわれる連合軍の戦車に対決する挺身攻撃を挑む誉なのだ。

「班長、行ってくるよ。」凛と結んだ白鉢巻へ、その決意のほどを見せて、にっこり笑顔でわたしに挨拶するのは角田伍長なのだ。「がんばってくれ」と手を振るわたしに元気に手を振って応える下士官や兵隊たち、そして恐らくこれが最後になるかも知れない握手を求める者もいる。

輝やかしい使命に身を挺して、力強く踏み進む足、足。

「俺も後へ続くぞ」激しい感情を互いの胸に受け止め合って笑顔を見せる、井出伍長、井上兵長、谷中軍曹、中島、三好、香川、藤川、田村、池田たち、そして勝瀬山口も。特に傷病のために私の手がけて全治させた兵隊たちに対する愛惜のおもいは抑えがたい。

あゝみんな征ってしまった。伸び上って振りかえり、手を打ち振っている彼等であるが、この掌に出ては恐らく還ってこないであろう。笑って死地に赴く兵士の軽やかなその美姿に思いを托していると、

「班長殿」という声。また、振り返ると田中だった。いいようのない感情がわたしの全身を駆けめぐるのだ。治療を見せようとはするが、

「萬治おまえさえ征くのか」と、その声はやや上ずっていた。

「こう会えないではないかと気を揉んでいました。長い間お世話になりました。ありがとうございます。お体をおだいじに。」

田中は、死出の旅にたつ人の言葉そのままである。

「おい萬治、今の言葉、ありがとう。俺も何かと世話になったな。楽しい思い出を作ってくれたのはお前たちだ。お礼を言っておく。萬治、死ぬのはいつでも死ねるんだ。できれば生きて俺のところへ帰って来てくれ。しかし、未練は禁物だ。少し遅いな。さあ征って来い。わたしはやっとのことで言うべき心の中を披歴した。

「班長殿、それでは…」

田中は、二人が互いに振り合っていた手を振り切り、拳手の礼を残して本隊を追いかけていった。

高原を渡った風が、彼等の武運を祈っているかのように二本の椰子の梢にひときわ強くそよいでいた。彼等は本道を二列のまま下っていったが、わたしの右手に田中が落としていった涙が数滴残され冷たく光っていた。

一四 野戦病院の夢

わたしたち、島本中隊が居を構えている天竜川付近も遂に攻撃の的になってしまった。迫撃砲弾であろうか、シユーツ、シユーツと、いやな音を伴って、谷あいの鉞力屋根を掠めると、必ずその後で、大げさな炸裂音が聞こえ、そこに、真紅の火花が上がり、破片がばらついてくる。まだ、弾着地点は遠いようだ。それに呼応して撃ち出す友軍の機関砲は、音も絶え絶え、それも滅多に聞こえない。日一日と数を増す敵の砲弾が休止するし

ばしの間隙を縫って、グラマン、ノースアメリカ、ロックヒードは、必ずやってくる。ストコフスキーや双発機25も驚怖心をかきたてる。操従士たちは谷合いの上空で器用に旋回し、おのれの有能ぶりを披歴して見せ、それからが続射してくるのだ。

ダダダダダッ ドドドドドッと射ちまくると、逃げ惑うわたしたちの鉄帽へ薬莢がカチンカチンカチンカチンと忙しくはね返る。その薬莢の刻印には一九三八とアラビア数字が刻まれている。彼等は八年も前に生産した銃丸を使っているのである。

余裕綽々、縦横無尽、そんな銃撃が止むのは夜間だが、それにとって代るのは地上火器の迫撃砲である。

気の抜けた太鼓の連打に似たトロントロンという発射音の後炸裂する火花の位置は、かなり我々の方に近づい

ている。サンファンあたりからか、この夜も戦車の軌(きし)みが聞えてくる。もはや、このあたりが最前線になってしまったのか。

谷間(あい)の夜は深まりやすい。谷を割る渓流が不吉な予感をともなって夜目にも白い。その夜半、荒々しい足どりがして、そこへなだれ込んで来た三人の兵があった。松尾、吉本、西川の三名である。東条伍長の指揮下にあって、バゴ地区の橋梁警備にあたっていた彼等だ。

三人の帰還は、ただちに中隊に伝えられ湧きに湧いたが、東条以下四名の者は相果てていた。中には自らの手で春秋に富む自らを手榴弾によって果てた者もあるという。

西川は負傷していた。橋を連合軍から守るため、匍匐(ほふく)の姿勢で敢(くさむら)に銃を据(す)えたとき、全身にしびれるような衝

西川 小太郎

激をおぼえ、噴(ふ)き出す鮮血で自分の受傷を知ったのである。カラバイン小銃による貫通銃創だった。

バゴを奪取された西川らは、太郎山の裏にいるはずの島本隊を探して、この天竜川ほとりに辿りつくまで数日を要し、その間、飲まず食わずであったらしい。

西川は、痛みと疲労と空腹を緊張で支(さえ)え、本隊にやって来たが、医務室のわたしの顔を見るなり、心が弛(ゆる)み、低い呻(うめ)き声を洩らすのだった。

中隊長にせかされながら腕の貫通銃創の処置をすませると、わたしは彼の両肩に手をおいて、こう言った。

「西川、よく帰ったな。御苦労だった。さいわいにして左腕だから、萬一の場合でも決断しやすいだろう。今夜は蝋燭(ろうそく)のあかりで十分見えもしなかったが、明日本格的な処置をしよう。瓦斯(がす)壊疽(えそ)の心配は全くないはずだ。

今夜、飯を食ったらこの場所で休むがいい。」

わたしはそう言ったが、彼が不憐でならなかった。何故なら、分隊長以下四名の同僚に死なれ、傷の痛手を負いながら十分に治療してくれるはずの班長（わたし）が明日四月十日に開設されることになっているネグロス島野戦病院の定員として転属して行かねばならないからだ。すでに、その命令は発せられ、わたしの手元に届いていた。

西川は、「はい、ありがとうございます。」と、小刻みに二、三度、頭を動かせて、謝意を表明するのだったが、その姿がいとおしくてならなかった。

卒直にいうと、牛殺しでもやらかせそうな頑丈な骨組みをしていて、喉頭を元ぐるようなどすの利いた声をしながら、眼に優しげなうるおいを持っていた。と、

「班長殿、どこかへまた行かれるんですか。」と言うのだ。

「知ってるのか。もう。」わたしは不思議に思ったが、

「いいえ、何も知りません。彼は一層うるおいの増した眼をしてわたしを見詰めた。内心どきっとしたが平然とした素振りを装い、もう一度、西川の眼を見た。西川は泣いているようだった。涙が一つ、そこにこぼれ落ちた。わたしそ泣けそうだった。

「何か、俺のことを聞いたのか。」

「いいえ、何も聞きません。でも、自分は、バゴから、班長、班長と思って必死でここえ辿り着きました。でも傷の手当てをしていただいている時、藤松班長殿が何処かへ行かれてしまうんじゃないかと、そんな思いがしてならないんです。」

彼は商売でいえばブローカーのように、人の気持ちを見すかす術を心得ているのだ。

「西川、お前たち東条分隊がバゴへ出たという知らせを受けたときから、俺は随分心配していた。一日として安らかな日とてなかった。東条伍長たちの戦死も予想していた。悪くいけば一人残らず死ぬかも知れないとな。本人を前においておかしいが、お前と少し知り合っておけばよかったと二、三日前も思ったことだった。お前と俺とは、今まで、殆(ほと)んど付き合いがなかったが、実はお前の眼に目を付けていた人だ。悪いけど、謂わば、ジプシーの占い師みたいな眼をしていると、うすりい丸当時から思っていたが、矢張り当たってたな。矢張(やは)りお前は鋭い感をしている。いよいよ、予期はしていたが、野戦病院へ転属だ。まあ、才能を買われてのことだからな。」

話が変な方向へ移りそうになったのでここで黙った。

「俺の島本隊付きも後数時間だ。しかし考えてみろ。人

間の機縁というものは尊いものだな。お前を思っている俺の所へ転属命令が出たのが今日だ。」

西川は、うつむいて聞いている。

「東条分隊は玉砕(ぎょくさい)かな、気の毒だ。西川に会って、お前と近づきたいと思っていた。ほんのわずかな期待をかけて人知れず待っている俺の所へ、傷を負ったお前が、俺に会いたいと希(ねが)い続けて、この天竜川の畔で会う。俺に治療を受ける必然性をもってだよ。野戦病院へ俺が転属していく間(ま)ぎわまで、患者と治療者の関係で情をかけ、かけられ、心を照らし合う機会を持つ。人生というものは、そういう廻(めぐ)り合わせだよ。そうでも思わないとお前だって救われないだろう。もし、お前の帰りがもう一日遅れていたら、俺とお前は会えなかったかも知れんし、お前の創(きず)だって化膿して事は重大になって

いたかも知れん。戦友の死、自分の負傷、班長の転属…そんな三重苦を背負ってまた戦列に加わるのも宿命、そんな西川を見殺しにして別れていく俺の気持ちだって宿命だ。戦友の分まで元気になってくれ。」

「班長殿、そんなにまで心を配っていただいて有難うございます。自分は班長殿の転属に間に合ってよかったと思います。いまの三重苦ですが、自分は、はやりバゴで死ぬべきだったでしょうか。四人の戦友の屍を残してもどって来た今、思いもよらず、医務室の班長殿から情ある言葉を聞かされると、なおさらそう思います。」

西川は、両方の拳を堅く握り、片方で眼のあたりをこすった。

「馬鹿な考えを起こしちや困るよ。上級者や戦友が死んで、そのことで思い悪らう気持もわかるが変

な義理立てで追い腹とか追い死には今は流行しないよ。みあと慕いて我は逝くなりで殉死した乃木さんがいけないんだ。古代だって埴輪で代用したんだろ、埴輪というと何か魅かれるが、英語ではクレイフィギュアといって粘土の人形だよ。鰯の頭だって信心からと言うから、お前のように気を揉む人々の心情を車条たちも喜んでくれてるだろう。もし出来るなら生き伸び、そして日本へ帰れれば戦友たちの最後をお家の人たちに話してやりたいな。」

何も云わないで首垂れている西川の苦悩が、時折り、ごくりと生唾を呑むたびに喉頭のあたりへ現れてくるのだった。

「随分話したな。今夜はここで泊ってくれ、熱発やらかすと大変だ。」

「はい。病院へ発たれる時は、お送りします。」

身心とも疲れ切っている西川は、三分とたたぬうちに鼾をかいてぐっすりと眠ってしまった。

西川にしてみれば、バゴの想い出は、彼が生きている限り、永遠に尾を曳いて、つき纏う嫌な思い出となるに違いない。

わたしも毛布を被った。野戦病院での勤務分営をあれこれ思い巡らせていると、ほのぼのとした好奇心が湧いてくるが、渓流の両岸に反射し合っては絶え、絶えては、また燃え上がる火焔の放射が映えており不気味な一夜でもあった。

その翌日、夜おそく古内少尉以下陣地を捨てて、斬り込み隊の面々が帰って来た。興奮と幻滅の混じり合った淋しい凱旋であった。連合軍の科学兵器に加えて、予期以上に旺盛なヤンキー共の敢闘には遂には抗し得な

かったのだ。わが日本魂、軍人精神という名のもと、彼等連合軍の兵器装備には立ちはだかる術となく、この斬り込みに関する命令は、断念取り消しになったのである。

サンファン道へ押し寄せては溢る敵戦車の放射火焔がボーツボーツと赤赤と映えて、天竜の岩壁は恐怖一色に塗りつぶされていく。その岸辺の谷中班で、わたしたちは悩むべき連合軍の情況や、今後の作戦予想を語り合ったが、床に入ったのは、もうかなり遅かった。

重い背嚢を背に、仆先登りの山途を喘ぎ喘ぎ登っていく行く手は、平穏無事でなかった。わたしは、野戦病院の開設予定地、照国台（友軍の名付けた地名）へ単独赴任していくところだった。

春礼林礼迫重砲弾や飛行機からの投下爆弾の炸裂に

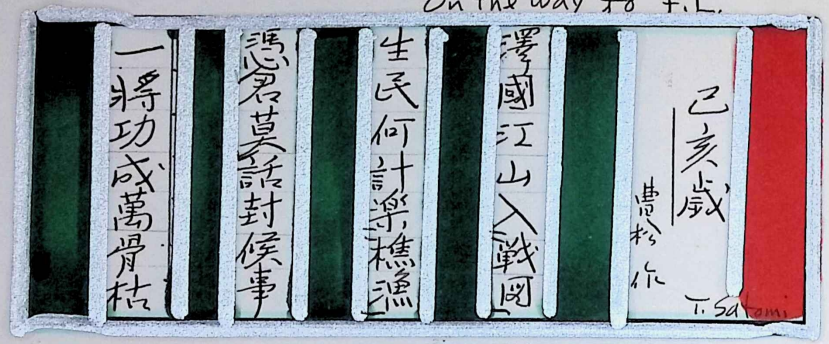
よるためであろう。かなりひどく痛みつけられている。坂道では、到る所、連合軍が空中から撒き散らしたと思われるリーフレット（宣伝びら）が乱れ落ちていた。腹立つ思いに耐えながらしばらく行くと、広い台地へ出た。もちろん地図もなく、この道を通った経験もないが、従来の感の頼りなのだ。ここは、たしかにサンフアン道の終点あたりかなと考える。そして、ここは、同時に、敵の襲撃が出来ているといわれているアポやギンバラオンへの岐点でもあるのだ。

巨大な弾痕が、赤茶けた穴を不態に見せつけている。しかし大きいのが三つも穿たれている。火焔放射器か焼夷弾で焼き尽くされた数台のトラックの残骸が転がり、鼻の先へ硝煙らしいものを感じるのだ。と、敵の小銃弾らしいものが頭上を掠める。カラバインか銃の連続発射か聞こえてくる。周囲に気を配ると、友軍の三

八式歩兵銃らしいのも近くでなっている。ここも最前線になっているのだ。もう奴さんの散兵が、ここまでやって来ているのかに考えたとき、またもや頭上を弾丸が掠めていく。

「畜生、俺には重大極まる任務があるのだ。ここで殺されてたまるものか。」と、ひとりごちながら、身をひるがえしてマンゴの大樹の蔭に入った。寄らば大樹の影である。

今しがた拾ったリーフレットを抜けて見ると、「一将功なり萬骨枯る」の見出しである。中国、黄松佳になる「亥歳の漠文から引用した詩の最後の節なのだ。アメリカにも智者がいる人だなと一瞬感心したが、あきらかに日本軍の指導者を中傷し部下の兵を軽視する、兵員の志気を削ごうとする彼等の意図なのだ。その挿画には、第十



四方面軍司令官である山下奉文将軍をモデルに置き、全く顔色を失った閣下が戦場の廃墟のさ中を、ただ一人、打ち伏す部下の屍を踏みまたぎながら、愛刀を手に落ち延びていく姿を描いてあるのだった。

わたしは一見して、ずたずたに引き破り、弾痕の巣へばら撒いた。敗戦への怒りか、あばかれた真相への憤りであったかも知れぬが、無性に腹立たしい思いだった。

小屈みに姿勢を低めて懸命に走り、台地を横切ると、右へ小径が開けていた。よし此所だと躍り込むわたしだったが、何か辺りがおかしい。手榴弾を手にしてその安全装置を外し、なおも怠ることなく警戒をしていると、斜面に伸びる草の根っこで足が動いた。が、日本人だ。と察知した殺那その顔が見えた。

「あっ、富永曹長。」不意の闖入者に思わずわたしは

松尾虎行　20.4.27. 名寄台全身爆創にて死す。
藤井良信 兵長　香川綾歌郡端岡村出身
20.5.3 西太郎山にて右大腿貫通砲破創で死す。
樋口利光　20.5.25　西太郎山にて　左腰部貫通迫击砲弾破片創に受創
〒535. 大阪市旭区高殿七丁目17-6.
実好三郎　20.4.14　笠置山にて右下腿軟部爆弾破片創にて死去

声を発した。

「曹長、いまごろこんなとこでどうしたんですか。もう少しのところでこれでしたよ。」

と、彼に手榴弾を見せて笑った。冷静でよかったことを互いに喜び合うのだった。

「僕は斬り込み隊を連れて、昨夜からこの付近で頑張っているんぢやが、示し合った時刻に来ん兵隊があるばってんがまだこんとよ。」と薩摩武士の風格よろしく言い放ってまた憂いの顔になった。彼は鹿児島の出身者だ。

「そいつは大変ですね。一服やりましょう。」

「マッチ持っとるな」という曹長に、

「うん、マッチはあるけどシガレリオはないですよ。」と二人はそこで打ち寛いで煙草を喫ったが、二人の会合はそれっきりであった。

古内常敏少尉　20.4.27　名寄台にて戦死
丸山義之　左肩胛下部乳房部貫通機関銃創、
徳島　那賀郡橘町立花出身
20.4.20　名寄台にて
脳振盪にて入院　20.6.5　死去

「野戦病院も忙しかですねえ。」
私は広島の教育隊で福岡の八女郡八女村出身の小泉大助の丸州弁を思い起こして使ってみた。
「照国っち、どげんとこかな。」彼は尋ねるが、自分が行こうとするその土地さへ知らず、やや心細かった。
不案内なので日が昏れて暗くならないうちにと、互いに別れ言葉を交して別れてしまった。
照国台と呼ばれるその場所に到着したのは、日の暮れだった。そこで、ネグロス島野戦病院長を命ぜられている箕田大尉と会い、斉藤少尉に招待された。
手術室付きを希望していたわたしであったが、すでに配置は決定しており、本部勤務に当てられていた。
斉藤少尉は小男で、欲深く、気むずかし屋で愛のない人だった。これから先を、はやくも不安に思った。

槙内理二　徳島　那賀郡足能林村出身
バゴにて右腹部盲貫銃創にて戦死　20.4.2.
堀田八郎　前頸部項部貫通銃創　バゴにて戦死　20.4.2.
森本嫡　徳島三好郡山城谷村　40.4.2.　バゴにて右下腹部盲貫銃創にて戦死
藤田勝利　20.4.14　一息台にて　左足関節部爆破創にて死去
船田登　愛媛伊予郡中山町出身
左臀部盲貫爆破創　20.4.14　一息台にて戦死
松友勇　20.4.14　一息台　右上膊軟部盲貫爆破創にて入院中
20.5.17　死亡

当分の間この人と連絡をとり合いながら、入院患者の受け入れ、院内内部の連絡、病床日誌一号紙の作製、遺留品の保管などの事項を司ることとなる。幸い、第六航空通信連隊（六航通）から黒田という衛生伍長が入って来た。たがいに協力態勢が出来る関係が出来たのは嬉しいことだった。
深い森の茂みの影に、ここかしこと粗雑な幕舎が張りめぐらされ、入院患者の受け入れ態勢が出来かかった。四月十三日以来、戦傷患者は続々と運ばれてきた。日日入院患者、数十名、あるいは百名以上に上る患者の受け入れは大変であった。もちろん彼等は予告なしで臨時入院だ。つぎからつぎへと運び込まれてくるのだ。朝も昼も深夜もやってくる。いかに現役の自分でもこれ以上の体力は続かないのだ。さすがに病院長も、この事実を見

松下金七　香川、恩無村出身　20.4.14　一息台にて右大腿軟部盲貫
爆弾破片創にて入院。20.4.22 死去
楠望福富　20.4.14　一息台にて受傷　野戦病院にて 4.23 死去
山下政夫　20.4.14　一息台にて受傷　F.L にて 20.4.23 死去
新家富雄　一息台受創　FL入院中。20.4.24 死去す。
鉄野馨　20.4.10　双葉台　全身爆創にて死す。
西尾住次郎　20.4.27　名寄台にて赤痢発病　入院中 20.5.10 死去
田中敏春　20.5.3.　西太郎山にて右大腿貫通迫破片創にて FL入院
20.5.20 死去。

かねて、一日五時間以上は睡眠しなければと忠告をしてくれるのだった。

やがて、ここにも空よりの襲歯が迫って来た。野戦病院の開設を知ってか知らずか、爆歯はこんな山の斜面にも迫ってくるのだ。

入院患者の中に敵機からの機関銃掃射によって殺される者も出来、幕舎内で就寝中迫歯砲弾による破片で、さらに傷つく事例も数多く見られるのであった。

日一日と野戦病院への入院患者は増えていくが、糧秣(りょうまつ)は決してそれに比例しなかった。この問題で何かと不安が生じてきた五月上旬には、病院は銀香台(いちょう)へと移っていかねばならなかった。

この野戦病院へ移ってくる前、わたしの所属していた島本工兵隊でも死者を多く出していた。

倉橋吉喜　20.4.14　一息台にて受創
右耿部 陰裏貫通砲弾破片創
大中豊　全身爆創にて入院 20.5.10 死去
井原繁　安芸郡奈半利出身
20.4.29. 左臀部 穿透性砲弾破片創で FL入院中
赤瀬芳數　20.5.15. 太郎山中腹　20.5.23 死去
背部第七頸椎棘突起左側に迫歯砲盲貫破片創を受け 20.5.16 入院　20.6.16 事故退院す。

太郎山、一息台付近で交戦中受傷しこのネグロス島野戦病院で入院加療中であった松下金七、山下政夫、新家富雄そして楠野福富たちも日を前後して（四月二十二、三日）死んでいった。バコロドでの東兵長が全身爆創で、兵舎で中岡、植村、小泉、徳田、また鉄野、渓、古内少尉たちも死んでしまった。

依然として砲の射歯は数を増し、空襲も激しさを加える。弾着地点も次第に野戦病院に近づいて来るようだ。

病院は、またもや、移動を決行しなければならなくなった。わたしと黒田は新しい開設となるその地点、養老台へ先発したが、そのわたしのいない間に、島本隊在籍の上甲兵長が入院中に自決したのだった。

右大腿へ爆創を受け、入院加療中であった上甲は創の深さを苦にしていたのか、それとも戦況に見切りをつけ

上甲 伝　愛媛 東宇和 渓筋村出身 20.4.14 笠置山にて右大腿軟部砲弾破片創にて入院中 自決す

山本助一　20.4.20 笠置山にて左大腿貫通砲弾破片創を受け ネグロス島FL入院中 20.6.6 死去す

西森鹿次　20.5.5 右胸部盲貫迫害砲弾破片創にて死す

坂本義平　205.15 西太郎山 右大腿軟部迫破片創にて入院中 206.21 死去す

片岡孝徳　205.15 太郎山にて右下腹部盲貫迫害砲弾破片創を受け死す

てしまったのか、小銃を抱えて繁みにはいり、冷酷な人間の爭いをせせら笑って、彼の趾が引き金を蹴った。その刹那、あらかじめ喉頭に当てがっていた銃口からの灼熱の弾丸が、確実にそれを貫き生命を絶ったのである。

平素は物静かで、責任感の強かった上甲伝兵長が自決を思うに至ったその動機を考えてもみたが、彼のためにその死を肯定しようと思いもした。

悲しい上甲の死を耳にした直後、大中が全身爆創で散華し、藤井良信、西尾住次郎、西森鹿次もそれぞれ、死んでいった。

一方、野戦病院の給与は終に来るべきところに来ていた。まず食糧が底をついていたのだ。それに併行して、兵士の意気もとみに沈滞の一途を辿ることになるのだ。

高山 太　香川 小豆郡 豊島村 家浦 砲
竹崎 有一
田川 勇
中川 一行　右大腿部盲貫砲弾破片創 20.5.10 愛創 笠置山 20.6.10 死去

入院してくる患者は戦傷者に限る。入院の際、一日百瓩とし、十日分一斤の米を持参すべきこと。

兵団の会報へ、こんな思い切った要請が書かれることになったが、もはや、こんな事が守られる情勢ではなくなっていたのだ。

濕っぽい台地の樹々の間へ、処置の出来なくなった死体が幾体も見られる。そして誰が云うともなく、姥捨山と呼ばれる野戦病院となり下がってしまったのだ。

事実、各部隊が、あたりを通過するとき、各隊で、足手纏いになる兵隊は、この病院と名付けられる地帯へ置き去りにして行ったからである。

空陸よりする立体攻撃は、ずいぶん長い期間に亘って続けられていた。

ある日、薬室付きの高田一等兵が、わたしに話した。

「今朝の六時からいまさつきまで、迫撃砲の打ち出す発射音を数えていたんですが、九千八百五十二回でした。頭が混乱してきて数えるのを止めましたが、この調子ですと迫撃砲だけでも一日に三万発を越えるでしょう。しかし奴さん豪気ですねえ。」

高田は気軽の利く兵隊のようだった。わたしは感心しながら言った。

「高田、お前も変わり者だよ。俺と一緒だな。」

と言うわたしにこたえて、

「でも、自分は壕へときどき逃げ込むんです。」と云う。

わたしは笑った。

「いや、そうじゃない。俺が壕の中へ入らんのは、有名になっているようだが、迫の数をそんなに数える人もざらにはいないはずだ。それだけお前には余裕がある

浜田朋之　香美郡大篠村徳王寺
藤田秋吉　宇和島市蛇357　一兵台にて20.4.14左腹部
言貫砲弾破片創にて戦死

んだ。しかし気慰めになるならともかく、そんな馬鹿な真似は止せ、それに薬室勤務者が漂々として壕の中へ逃げ込んだりしては駄目だ。劇毒薬を盗まれでもしたら困るだろう。」

「へえ、何かあったんですか。」

「いや、今朝も俺の所へ来て、毒薬を少しだけ分けてほしいと言う人がいたんだ。」

「なにに使うんでしょう！」

「在留邦人だけど三人の集団で来ていた。自分の子供を殺すつもりだろう。哀れな話だよね。」

「足手纏いになるからでしょうか。」

「そうだ。それに、泣き喚いたり、大声を出すと、観測機に感付かれて、そこを一発でドカンと殺られるからだ。」

「悲劇ですねえ。」

三原 順吉
日戸 竹正
宮崎 初行　香美郡赤岡町 206.
松下 金七　香川学 恩無村 20.4.14 一息台にて
右大腿軟部盲貫 爆弾破片創 FL入院 20.4.22 死去さる

(240.)

「結極、人間が最後には何を求めているかがよくわかる。親子だの、母性愛だのといってるが、遂には自分自身だ。もちろん、他人への気づかいもあろうが、一つの哲学的命題だな。それが実証されようとしているんだ。」

高田は薬室の保管品が気になったとみえ、急いで帰っていった。

病院内でも、数百の患者が死に絶えていった。

積み重ねられた遺留品の包みを前にして、果たして、わたしに、これらの品々を守り抜くことが出来るだろうか、そんなことを考えると、全く嫌になるのだった。

パチ、パチと、迫害砲弾が近くで炸裂した。いやな、その硝煙の臭いが立ちこめている病院本部へ、

「お願いします。」と、担架が運ばれて来た。

申し合わせたかのように担架隊は、白鉢巻をしている。

森川 信義　20.5.15 西太郎山にて
左臀部盲貫砲弾破片創 受傷
ネグロス島 FL入院中 死去さる

村上 稔　愛媛 周桑郡丹原町池田
松崎良吉　夜徳町
松崎保孝　安芸郡和喰村琴浜

(241)

連日の雨。こんな泥濘の山坂を交代しながら担架を運んでくるのは大変な仕事である。

患者は、第二航空測量、鷲部隊のパイロット下士官だった。痛い痛い。唸るとも泣くともなしに声を上げている。声を張り上げることによって苦痛が和らぐのだ。

「どこでやられた。」

「養老の滝付近です。」「迫か……」「……」「爆弾なのか。」

「……」「おい一体どっちだ。」今度は、黒田伍長がわたしに代わって気合いを入れる。

「だめだっ 誰か返事をしろっ。」

「はいっ 迫です。」

「これっ位のことで、はっきりしろ。下士官にもなって腕の一本や二本折れて唸るのは、みっともないぞ。」

兵隊たちは千切れそうになって、ぶら下がっている左

腕に注目したり、われわれ病院勤務の人達にどぎまぎしたりで答えられないのである。

「やらしたのは、残念とは言え、左だ。幸い利きれいだから治りも早いだろう。気をしっかり持つんだぞ。心配するな。いいかっ。」

わたしの銅羅声が迫撃砲のように発言に抵抗するために、一層高まる。そうでもしないと耐えないばかりか、精神的創痍の治療に期待しているわたしの言いそうなことである。患者し輸送者たちし、病院へ怒鳴りこんできたようなしのだが止むを得ない。

やがて、五月し半ばを過ぎると、一人一合の粉の配給があった。それし、しう最後かし知れない。

物資の輸送路は遮断されており、日本からのといってもし、すでに制空、制海権し失っている。五月下旬に至って飯盒の蓋一杯の粉の配給があった。食糧はこれで最後ということだ。



勤務の隙をみて、兵隊たちは粉を鉄帽に入れ、生木の棒切れで小突いて脱穀している。さらに玄米を瓶に入れ同じく棒で搗いて精米するのだ。これに要する体力の消耗と、この米自体のもつ力にリーとで幾何の差があるだろう。

多忙な勤務の日々が明け暮れしているうち、命令受領の順番がめぐって来た。将校、下士官が順番で当たらねばならない最しいやな勤務である。

山に近いやられて、ほとんど日の目を見ることのできない我々である。連日、陰惨な雨と蒸し模様の天候ばかりだ。乳退治のために洗っている軍衣や襦袢は、二週間し前に、幕舎の中へ吊してあるのいまだ干てこな

い。

濕った軍衣と編上靴のいでたちで、参謀本部がいるはずの笠置山へ向かった。万一に備えて、当番として伴っていくのは鈴木上等兵である。すでに栄養失調気味のわたしであったが任務は任務だった。

双葉台へ上ると、連合軍の重火器が、火を噴いていた。盛んに射ち出す自動小銃の流れ弾丸が身辺を襲ってくる。ここは、太郎山に連なる斜面で、第一線であった。でも笠置へ行くには、ここを強行突破するしかない。

「鈴木、いいか」　振り返って、覚悟を促すわたしにうなずく鈴木の顔に緊迫の色が見える。

「俺について来るんだ。」　小屈みに焼け野を突っ走ると彼も後に従う。ヒューン　ヒューンと、小銃弾が後を追い、右を左を流れていく。ダダダダッと軽機の連続

点射が加勢している。

焼け野を横切って、二人が木立ちに突入しようとした瞬間、低い雨雲をかぶって旋回していたノース・アメリカの投下爆弾が炸裂した。耳をおおったまま振り返ると鈴木も異常なしだ。まず一安心、最大の難所は突破したのだ。

「鈴木、どうやら関所は抜けられたようだ。これからは太郎山からの迫の発射音に気をつけるんだ。帰りは東側へ手回しよう。」

二人は強行突破の成功を喜び合い、どんどん歩度を伸ばして進んで行った。

やがて到着した笠置山から見る双葉の台地は、まさに紅蓮の炎が渦巻き、茶褐色の煤煙が噴き上って地獄の様相を呈していた。

「鈴木、疲れただろう。すこし休憩だ。」

残り少なの煙草に火を呉けたが、わたしの視線は、さきほどから太郎の山脈に注がれていた。そのいただきは生ま生ましい戦禍そのままに櫛削られて見るに忍びなかった。溪も中島も、あそこで死んだのだ。まだ一部の島本隊はあそこを死守している。その後、犠牲は出なかったであろうか。みな死なずにあのままの人員が残っていてくれればいいがと、祈るような気持だった。

笠置の頂を下って、右に下り、天龍川左岸の兵団を探し当てた。兵団長以下諸参謀は、鹿が谷へ後退した直後だった。疲れはひどく、胃のあたりに虚なものを感じながら、鹿が谷で複雑な命令を受領したわたしたちは、雨びぬかるみの道を病院本部へ引き返して来た。

そこには、また中島上等兵戦死の悲報が待ち設け

ていた。盟友、溪に死なれ、中島の訃報を聞くことは、自分自身の死にも等しかった。同時に庁岡上等兵、池田堅田等も仆れたとの事だ。すばらしい馴染みを失うことは心痛いことだ。わたしは生きる希望を失ってしまった。

野戦病院の死亡者にも富田伍長、池田、井原、松友、田中敏春、小原、山本助一があり、安永恵の戦死は前日伝えられたばかりである。いまここで多くの友の散華を知らされてみると、憤りと悲しみで胸も張り裂けんばかりだった。

あの太郎山の斜面を解盆で彩って、溪も中島も死に絶えた。相棒の二人は処を同じくして昇天したのだ。部下の食料を奪って、分隊長が、ある夜半、離隊していった報告も受けたが、何か應がさしただろう。もはや、その軍曹を責める気にならなかった。

夜・毛布をかぶって、いろいろ思っているうちに、雨が止んだらしい。木立ちの明るさが増したようだった。隣で休んでいた黒田伍長は、眠ってしまったようだ。

うとうとしていると、髭は伸び、髪は生え放題である一人の兵隊が、わたしの部屋に入って来た。誰かは見極めにくいが「班長殿、米をください。」と手をさし伸べるのだった。その声でよく見直すと、田中萬治その人ではないか。ひどくやせ細っている彼に、

「おい萬治、どうしたんだ。」と叫ぶと、田中萬治は、

「斬込隊に選ばれて、ギンバオンへ行きました。しかし、アポに飛行場ができていて、重爆機や軽爆機が盛んに発着しています。そして警戒が厳重で任務の達成はできず、そのまま帰って来ました。自分等は、この一週間何も食べていないのです。」

と言うのである。

「よし、よし、田中。それにしても、よく此所まで訪ねてくれた。生憎、ここへは米を持っていないが、六航通の森本尉に頼んで、航空食を貰ってきてやろう。心配するな何とかなるよ。」

ここまで言ったとき、わたしは目が覚めた。

「ああ、夢でよかった。」自分の言葉に安心しながら起き上がってみた。

わたしの全身は、ひどい汗のため、ぐっしょり濡れており、何だか倦るくて空しかった。

戸外には人らしい姿は見えなかった。が、幕舎の病室で、患者が低くうめいていた。そして、雨に濡れた木立の葉っぱが、わずかに、雲間から覗いている青い月に照り映えていた。

一五　隊長の死

不安な一夜が明けると、わたしの体は、身動きもとれぬほどの重態になっていた。食糧の不足と、連日の過酷な勤務が、遂にわたしをして、脚気兼栄養失調症におとし入れたのだった。動悸の高鳴り、腹部から陰部にまできているひどい浮腫、全身の倦怠感、四肢の痙攣、こうした症状は一日一日と、深刻に私を悩ませるのであった。

連合軍の空陸よりする攻めは、昼夜の分かちなく、この病院の斜面に迫撃してくる。脚気などで死ぬのは嫌だ。わたしは隠れたが、幾らあせってもどうしようもなかった。野戦病院には、もはや、本部勤務のわたしにすらくれてやる薬物すらなくなっていた。同僚の黒田が、ヴィタミンだの、カンフルだのと、いろいろ立ち回ってくれたわたし自身も、全財産の私物をなげうって、薬物を求めたのだったが、第一に人体自然の良能を成す食糧が尽きていたのである。すでに体力を消耗しつくしているわたしには、少々の医薬品では焼け石に水、格別に何という効能も現われてこなかった。

陰部まできていた非道い浮腫が干いてしまうと、哀れわたしの体は、骨と皮になってしまった。

連合軍の遊撃隊は攻勢に肉迫し、もはや養老の滝付近も奪取されているらしい。

連日責め立てる兵団の有富参謀の要求に応じて、野戦病院は、三度、移動の手筈を整えていた。次は脇元神らしい。



けれども、わたしは、すでに決意を固くしていた。もう、この地を離れまいと。淡、中尉の眠る墳墓の地であ

る太郎山を、もうこれ以上隔てるには忍びないのである。
わたしは、ひそかに手榴弾を集め、潜入してくる悪魔の群れ、敵の炎兵に、それを投擲し、最後の一個で、我とわが身をきずつけ、潔く自決するのだ。と。
空しい日々の明け暮れ。その山の端に、いいようもない色合いの雲がかかっている朝まだきであった。砲が轟き南北空を軽爆機の群が旋回していた。斎藤少尉し、馬場曹長し、次の中継地、脇天神へと出発していた。黒田伍長は出発準備を完了したものの、この地を離れまいとするわたしに手古摺っているのだった。
坂下から上って来た病院長に、強く移動を責め立てられたが、わたしは、無念無想、すでに悟りをひらいているのだ。遂に、わたしは、決意のほどを病院長に語らなければならなかった。と、病院長、黒田太尉は烈火

のごとく憤り
「そいつは絶対に赦せない。血気にはやるな。君がここで死ねば、衛生部員としての立場で、将来救い得るかも知れない人命の幾十、幾百かを、君自身の手で殺してしまうのと同じ結果になるんだ。傷本隊の、君の同僚だって、君が自決したなんて情報を耳に挟んでみろ、その人たちへどんな影響が心理的に伝わっていくか。それは、結極は君の罪悪になるんだ。この僕だって君を頼りにしているんだよ。」
さらさらした手榴弾の弾体を、指先で撫でながら、わたしは切羽詰った何とも表現のつかない感情に冷えていくのだった。
病院長の言葉を聞いていると、それもそうかも知れない。衛生部員なんて最後のどどのつまりまで犠牲なんだ。

ここまで追い込まれながら、なお自己の主張を貫き得ないのだ。しかし、自分の任務をもう一度、振り返ってみなければならないわたしでもあったのだ。

黒田伍長の、親身も及ばぬ誠意に応じて、やっとわたしは移って行く気になった。頑健な黒田に装具を持たせてわたしは歩く、というより、彼にくっ付いて行くのだ。

悪臭を放つ友軍兵士の屍体がどこにも群がり、腐敗して溶けているのもある。やがては自分もこんな姿になりそして腹のあたりから溶けていくのだろうか。

吐(おうど)をさそう臭気が一面に漂い、わたしたちの体の中にまで泌み込んでしまいそうだ。黒田は重い荷物を負いながら、なおかつ、わたしをかかえるようにして支えてくれる。ああ本当に相すまないことだと思う。

黒田伍長は第四十八飛行場中隊付衛生伍長であったが、

熱心な勤務と、優れた手腕を買われてネグロス島野戦病院に抜擢されたものであった。この病院内の勤務者の中では、特に親しめる人物もなく、わたしたちは互いに兄弟のごとく扶け合い励まし合って貪欲なドブさんこと斉藤少尉に対抗してきたのだ。しかし、このたびのわたしの懼病によって、わたしは随分、彼黒田に恩顧を受けてきた。彼の一挙手一投足に堪らない感動さえ思うのである。他人の親切や好意に、わたしは人一倍感動する性分なのだ。病み細って、今にも消え入りそうな自分が、また再び立ち直って、黒田の大恩に報いる時機が来るのであろうか。

すっかり体がだめになっているのと、心臓の鼓動の激しさ。まるで這うようにして、二人が進む途には、泥濘の坂があり、深い溪谷があり、そして高い

天神山の斜面が連なっていた。
雨が燻んだかと思うと、濕りも含んだ不透明な霧が横に吹き流されては、我々をすっかり包んでしまったりする。体力にも限度がある。わたしの体は、もうこれ以上続きそうにもない。黒田に迷惑をかけるのもすまない。腰にくくりつけている手榴弾にさわってみるが、弱り果てた指先では、とても解けそうになかった。黒田の警戒も厳しく、どちらかが放尿するときでさえ、彼はわたしと、一メートルも離れることがないのだ。杖がわりにしている刀さえ取り上げられ、遂には、手榴弾さえ没収されてしまったのである。
暗に決行をするつもりだった自決も、この道中ではできなくなった。衰弱し切って我が身とは思えぬ体に鞭打って、やっと天神山の中腹、脇天神に辿りついたのだ。

それは任務は重し、死は軽しの実践であった。
道中はもちろん、このあたりにも死骸は無数に転がっている。
わたしは、先発隊が組んでくれていた蓑舎へ、一人だけで入った。まだ奥地へ続いているらしい小径のすぐ右側であった。が、この脇天神の斜面にも立体攻撃は迫ってきた。早くも侵入してきたらしい遊撃兵の射つ自働小銃や、カラバイン銃の音もして、また、何かの拍子に弾丸の飛んでくることさえある。迫撃砲もこちらへ方角を変えているらしい。時折り、その弾丸が炸裂するのだ。
突喊も続行される。もう何処にいたって最前線なのだ。
ここに収容された傷者が訴える苦痛の唸り声、それはそのまま敵の観測機に捉えられ、この病院の所在が発覚され、ただちに攻撃目標になるのである。

その夜、わたしは痩せこけた左腕に注射針を刺して、横になったが、心臓の鼓動は不気味なまでに、激しく高鳴っており、やがて来る自分の死期までに、心の中を整理しておこうと考えるのだった。

その翌日も連合軍の火器は、多くの弾丸を打ち出していた。雨も降っている。黒田は病院長と、次の野戦病院の設営地を探索に出かけていった。

病院本部の勤務者であるはずの馬場曹長は、もう二、一か月以上も、防空壕へ入りっきりで、顔を忘れるほどだ。癌や薬室からの連絡にも、口先だけで答へ指示をするばかりになっていたわたしは、雨の洩る幕舎の下で、毛布にくるまって、尽きかけている三十三才六か月の自分を命を愛おしく思いながら病を養っていた。

と、突然、北斜面の幕舎近くで轟然一発、銃声がとど

ろいた。その瞬間、しまや、と思うある想念が胸をよぎった。あわてて、それを否定しようとした。が、たしかに友軍将校の拳銃の音だ。時ならぬ時に、場所ならぬ場所でどうしたことか。暴発であればいいが……しかし、しまや！

ある種の云いようもない不安と焦りが頭の中を駆け巡る。わたしは毛布の下で、胸にのせていた手で十字を切り、神に祈った。

わたしの予感は的中していた。在留邦人で現地召集の三人の兵隊、弓削少佐の当番が、大声で泣き喚きながらこちらの方へ駆けてくる。狂人のように泣き叫んで、わたしに何か言うが、よく聞きとれないのだ。

「おい、しっと冷静にしないか。見っともないぞ。気を鎮めて話してみろ。」

わたしの傍に、一人は右を静め、判然とわかる態度で直立不動の姿勢をとった。他の一名は、それに倣った。二人は、その固い姿勢のままで、交々経緯を語るのであった。

予備部隊長（少佐）は笠置山の戦闘に参加し、激しい三日三晩の総司令をとったが、迫撃砲弾による右下腿骨折で負傷を負った。当時の養老台の病院へ入っていた。この度の病院移転に際して、この二人の当番が、交代しながら背に負ってきたのであった。ほとんど連日続く雨のため山峡の道は泥濘ばかりだ。隊長にしろしろのことがあってはと、二人は十二分に配慮はしたが、度重なる不幸が出来した。谷合の曲り道で、隊長を背負ったまま足を滑らせて、十五、六メートルしの斜面を転落したのである。隊長は、その時、更に左上膊の骨折をして

しまったのである。背負っていた当番兵は膝関節の捻挫ですんだが、隊長は不運であった。どうにか、脇天神の幕舎へ運び込んだが、病院には、薬物し繃帯材料しなかった。創は化膿し、経過は悪くなるばかりだった。当番の二人は誠心誠意その介抱に添っていたが、隊長は、当番二人に、それぞれ別の用件を依頼して病室から遠ざけ隠し持っていた拳銃で、念願の自決を遂げたのであった。

物語るこの話を黙って聞いていたわたしは、この在留邦人がよく隊長に尽くした努力や誠意に心うたれる思いであった。

「そうだったか、しかし心配することはない。これは必ずしもお前達二人の責任に帰すべきものではない。二人とも部隊長に対しては、部下として看護人としてよく尽くしてくれたんだ。なすべき義務は果たしたんだ。しか

し、隊長が死なれたのは、もっと深い原因しあっての事だ。俺にも少し、そんな気持ちがわかるような気がする。

弓削少佐殿には、養老谷へ入院された時、はじめてお会いしたんだが、実に立派な方だった。惜しいことだ。」

そこまで言うと、五月上旬の、雨と機銃掃射の激しかった夕刻のことが、わたしの心に蘇えってくる。

担ぎ込まれた担架の人、弓削少佐に、病床日誌一号紙作製のため、わたしが隊長に、軍隊の勤仕年数をたずねると、「三十八年だ。」と、こたえるのに驚いて、「今回の勤仕年数だけでいいんですが……」と聞き返したことがあった。すると隊長は、わたしに「そうだ、現役引き続き三十八年だよ。」と、言い放ったのだ。

その隊長殿の重苦しい淀み声と、厳めしい風貌を刻んだ顔形が思い浮かんでくるのだった。

「そうじゃ、隊長殿の遺髪と遺留品を纏めたら、原隊へ帰ってくれ。埋葬はこっちで鄭重にさせるから。」と言ったのを訂正して、

「そうだ埋葬は三人にしてもらおう。見ず知らずの他人にしてもらうより、直属の部下にしてもらうのが隊長殿もよかろう。お前たち最後のお勤めだ。見晴らしのよい場所を見付けて鄭重に葬って上げてくれ。」と言うと、

「はあ、是非そうさせてください。」と言った。

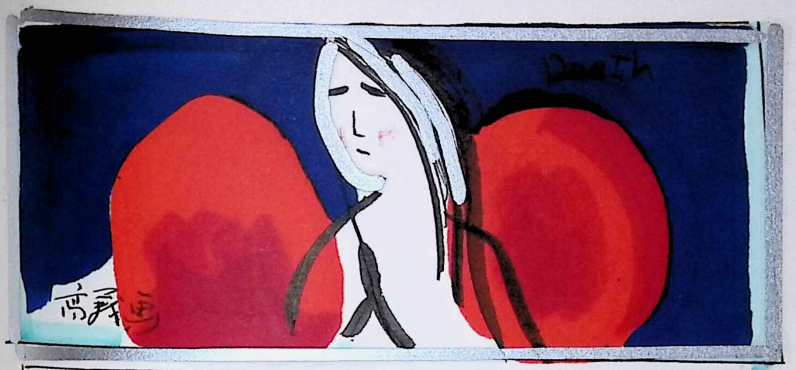
三人は、まだ涙の乾いていない顔一面に喜びの色を見せて、挙手の礼をして、坂を下っていった。

迫撃砲は気狂い太鼓のように鳴り渡っているが、幸いにして観測機らしいものの姿は見えなかった。

小一時間も経ってからであろうか。三人がやって来た。忠誠を励んだ甲斐もなく、主君に先立たれた三人を慰う

と、せつないしのか込み上げてくる。
彼等の手には、隊長の遺品であろうか、たいせつそう抱かれている。
わたしの前に横隊で不動の姿勢をとった。何れも四十才前後、現地召集で軍籍に入った陸軍一等兵である。
「報告します。」
「いや、堅苦しいのは止めよう。」
「はいっ」
「髪はとってくれたか。」
「はいっ 持っております。」
「本当に御苦労だった。ここは病院といってはおかしい、姥捨山だ。病院勤務の、しかし現役の俺が栄養失調や脚気をやる位だから、ほかの勤務者は五十歩百歩だ。患者に対して十分な世話し出来ず、相済まないことだ。

しかし、この時の流れだ。君たちは現地召集なんだ。今後状況がどうなろうとも、身心共に頑張って、自身を殺めたり、殺されたりしないようにな。本隊の位置は目星がついているのか。多分、千六百三高地を越えた台東がバンダナウエイつまり桜盛地だろうな。俺に頼みたければ調べたっていいぞ。」
隊長の死によって、心が砂漠になっているだろう二人が不憫に思えてならないので、つとめて優しく言ったつもりだった。
すると、背の高い方の一人が、一歩歩み寄って、
「班長殿、少し お伺いしたいのですが…」と言う。
「何だ。わかることなら…」
「はい、今さっき、部隊長殿のお心がわかるとおっしゃったのですが…」



「ああ、そのことか。」

わたしは先刻自分の発言したことを思い出した。

「それでは、大へん僭越なんだけど、隊長殿に代ってひとこと言わせていただこう。君たち二人には長い間お世話になった。重々お礼を言ってご苦労を感謝する。そして、この度のわたし自身の誉を相済まないと思っている。日本も未曾有の危機に直面したが、わたしは一億玉砕の声に共鳴して、このネグロスの山ん中で、すべての部下を殺したくはないのだ。いずれは時節が解決してくれる問題だろうが、この闘いもそう長くは続かないだろう。先に心を崩し、隊長としての責めを果たし得なくって恐縮だが、今後、隊の諸君に、単なる血気にはしらず、最善の処置をとってもらいたい。部隊の各位の健在を願いながら死んでいったと伝えてくれ。

福井正典　徳島 海辺郡 牟山支町
脚気兼栄養失調症にて 20.6.29 死亡

野中盛幸　〒785 徳崎市 大谷 ~~井~~ 65

すでに死んでいった部下に会って自分の心も伝えることも出来ようかの考えも働き、こうした途を選んでいくと伝えてほしい。以上。」

こう言い終ったとき、この二人が、不動の姿勢をとったまま立っていることに気付いた。

「ああ、ごめん、休め、休めだ。もう楽にしてくれ。」

わたしは、あわてたが、二人は、体の硬ばりを解こうとはしなかった。

「それでは、道中をずいぶん用心して、本隊を追ってくれ、また会うこともあるかも知れないよ。」

「お世話になりました。副官殿に申し上げます。班長殿お名前を。」

「なあに、名前を明かすほどの者ではないよ。ただ、工兵隊からここの本部へ転属して来ている壕へはいらない

軍曹と言ってくれ、いずれはわかるだろうはっはっは。」

ここ数か月来笑ったことのない笑いをして、なんだか元気づく思いだった。

「それでは失礼します。」

「お体をおたいせつに。」

と、二人は、別々の声を挨拶にして、坂道を上っていった。

一六 身代わり

そのすぐ後へ、偵察に行っていた黒田伍長が帰ってきた。

「やあ、ご苦労さん。雨が強くて大変だったろう。」

わたしは、久し振りに、気分が勝れていた。

「ありがとう、班長、今日は病院長に担(なぐ)られてなあ、いささか腹が立ったねえ」

彼は、こう言いながら、幕舎の入り口で、帽子を絞(しぼ)り

わたしを振り返った。

「俺が元気だったらなあ、黒田班長ばかりに苦労をかけるんじゃないのに、本当に済まないな。」

はかない自分の健康をかえりみて情なかった。

「俺も照国台を偵察するとき、彼に頭をやられたよ。自分が叱(どし)って、うまく口が利(き)けないからいらいらして、手が早くなるんだろうなあ。任官して、もう一人、俺が担られたのはドブさん、あのドブさんだ。」

「とにかく藤松班長の言う、中途(と)半端(ぱ)のグループの一人だからなあ。」

わたしたちが他愛もない憂(う)さ晴らしをやっているところへ、安田一等兵が入って来た。眼をさかんにこすっている。すると、黒田伍長が、

「おうい、安田、泣いているのか、それとも、飯(めし)を炊い

ているのか。」

と笑った。安田は眼も開けられないのに、得意そうに、

「はいっ 今日は飯であります。」

と力(りき)んで答えるのだった。

「へえ、米がどこにあったんだ。そいつは嬉しいなあ。」

と、黒田は言った。それしそのはず、米らしいものを食うのは何日振りであろうか。

「黒田、今日は弓削部隊長が自決したんだ。あの当番の三人、本当に可愛想だったよ。あんな人たち、当番でなくてし、友人として付き合って見たいと思ったよ。俺が後の処置に協力したんで、隊長が一升ばかり残していた米を全部くれると言うんだ。」

「全部 もらったの。」

「いや、全部 俺がそれば、あの三人が困るしの、武士

は食わねどで、全然もらわないつもりだったけど、あの在留邦人の三人、どうしても聞かないんだよ。結局三分の一ずつ分けたんだ。」

「それで、安田が泣いてるんだな。」

「そうだ。あれっぽっちの糠(ぬか)の炊事で、安田を泣かせるのも気の毒だとは思ったけど、今日は黒田が偵察に出てるし、俺が弓削少佐になったりしたからな。」

「ははあ、彼等三人に訓示をしたんだな。いつかしやったなあ。」

「うん、しかし、なんだか気持ちがいいなあ、あんな言える身分になって、あんな当番が三人もくっ付いてくれると本当にいいものだろうなあ。ところで、偵察はどうだった。」

わたしは、後方の様子を聞きたかった。

「それがまた大変なところ。道中は泥濘で死体の山。どこへ行ってもだ。傷がないので、ほとんどのたれ死にだ。古いのも新しいのもあったなあ。迫撃砲は、やはり狙ってるねえ。迫で殺られたのも二、三十体はあったかなあ。病院の場所は、そこの坂を一つ越して一キロぐらいと所だが、藤松班長だと三日かなあ。」

「そんなのか。」

「こんどは 僕がおぶっていくから一日半で着きますよ。」

「まて、その話は止そう、悲しくなるから。」

わたしが話を切った。安田は洞穴へ入っているらしい。連日連夜 降り続く山中で、物を煮たり炊いたりするのは大変である。湿っている立木しかないので、それをマッチの軸ぐらいに割り、ゴム布などを燃しては火を起こしていくのだが、昼間は煙、夜間は火の明かりを洩らすことは堅く禁じられている。爆雷や砲撃の目標にされるからだ。だから炊事は、すべて横堀りの穴の中でなされる。穴の入り口は、天幕か何かで覆っておかねばならない。だから、粮を炊き上げるころには、煙のガスや煤のため、眼を痛めるのだ。

夕闇があたりに迫り、そして夜が訪れる。明日の命を誰も保証できない戦場の、墨のような闇のかなたに、迫撃砲は、いつまでも止まずに鳴り渡っている。

やっと、待望の食事の準備ができたようだ。何日振りの食事であろうか。全く暗い闇そのものの中で、黒田伍長、安田一等兵、そしてわたしの三人は食事にかかった。車座をして、右に安田、左に黒田が坐っていた。せわしげにする粒の味も味わえぬ位、わたしたちは迫撃砲の発射音に神経を尖らせていなければならない。

墨一色の世界に、あちこちの一角から、パッ。パッと、火を吐いている迫撃砲に対処しなければならないからだ。

本陣はコンソリー峠らしい。かなり以前にコンソリーの爆撃機を墜落させたところの名称である。敵は、ここを砦にしているらしい。

そのあたりから、多く打ち出してくるが、そのトロントロンという発射音の高鳴る前後には、必ず稲妻のような光線が暗の中に浮き出されるのである。

もう、こんな体験は連日連夜のことで、格別驚きもしなくなっていたが、不感症になっていたかもしれない。しかし、この日は、弾着地点がかなり病院の斜面へ近よっているのだ。

わたしたちは糧を喰っていた。

「どうも、今夜は目標が近寄って来たな。」

わたしが、こう漏らしたときだった。コンソリー峠から突き出した異様な発射音。

「おい、伏せろ 目標になっている。」

用心を促して叫んだとき、ヒューッヒューッと奇妙な唸りを伴って迫る弾丸が、轟然一発、空間へ火の塊を放って炸裂したのだ。一瞬目をつむった目先へパッパッパッと渦が巻き、指で圧迫している鼓膜が劇しく振動する。と、コロコロコロと、か細い虫のすだくような音が耳元に聞きとれたのだ。

不吉な予感、漆黒の闇の中で、

「おい、黒田、」

「……」

「安田」

「はい」

「おい黒田、どうした。」
「……」
悲しいかな、声はない。闇の中で、黒田を抱えてその名を呼ぶわたしの声は、無念さのため、悲しく震えをおびて幕舎の中にひびいた。
「おい安田、黒田班長が殺られたぞ。」
「えっ……」
闇の中で、安田の声は続かなかった。
「安田、壕へ行って、黒田班長が殺られたと言って、馬場曹長を呼んできてくれ。」
「はいっ、行ってきます。」
悲しいかな。憎むべき敵弾によって、黒田は仆れてしまった。安田が向こうに行った後、わたしは、怒りのため全身がふるえ、涙し出なかった。

黒田伍長（岡山学部部出身）満州より南下
ネグロス島 通称 脳天神にて 20.6.6 戦死す
心臓部貫通 迫撃砲弾破片創 十後8時1分。

一体どこをやられたというのだ。やや落着をとりもどしたわたしは、黒田の体を検べにかかった。でも異状はないようだ。深い闇の中で、もう一度息を吸い、そして静かに、頭部、頸、胸と、念入りに撫でおろしていくと、ちょうど心臓の箇所にあたる服の上衣に、小さな穴ができていることに気付いた。
今朝、黒田が病院中継地の偵察に出かけるとき、雨に濡れていた彼の上衣を見かねて、わたしの上衣を貸してあった。その上衣に穴など開いていようはずがないのだ。不思議に思い、そこをまさぐると、指先はつけ元まで入り、生ぬるい、どろどろしたものがついてくるのだ。
黒田伍長は、心臓に迫撃砲弾破片創を受け、その場で戦死したのである
彼の戦死を確認して、ひとたび茫然となり、つぎには

軽い羨望を覚えるわたしであった。

「黒田、貴様、備えたぞ。死ぬんだったら睨死がよかったよ。うん、この方がよかった。」

わたしは、闇に向かって静かに、ひとりごとを言った。そしたら、涙が、はじめて溢れ出るのだった。

迫撃砲弾は、なおし、身辺に炸裂している。今夜は弾丸の数も最高だと思っていると、またしても至近弾が火花を散らして炸裂した。

それと同時に、安田が、暴言へなだれ込んで来た。息せき切っている。

「何と言ったか。」

わたしのせき込む問いに、やや間をおいて、

「どうしすみません。明日の朝行くとの事です。」

と応えるのだった。

「どうせそうだろう。どうしてこうも冷たいんだろう。同僚が死んだというのに誰も来てくれない。弾丸がこわくて、戦友道が発揮できないやつは全部死んじまえ。」

激しく罵倒している言葉を、自分が責められていると感違いしたかも知れない。今の今になって嫌な思いをさせるのも気の毒だ。やがては玉砕して全員死に絶えていくかも知れない。生きているのもわずかの間だ。だから、思うように壕へ入っていたし、みんな思い思いに行動してもいいんだ。〜〜わたしは、ふっと、そんなふうに考えるようになっていた。

「安田、お前を叱っているんではない。今夜は特に弾丸の数が多いらしい。壕へかえって気を付けてくれ。空しい思いだった。安田を帰して間もなく、黒田の両手を組んでいるわたしの所へ、また安田がやって来た。

「班長殿、今晩だけでも壕の中へ入ったらと、曹長殿が言っています。」と言うのだった。

「うん、ありがとう。心配してもらって嬉しいが、今夜は黒田のお通夜だ。黒田も俺がいないと不安かもしれないし、俺も黒田にはずいぶん助けてもらってるから彼と一夜を明かすのが義務だ。黒田と一しょに寝るさ。」

安田は、わたしの一徹さに匙を投げたであろうか、詮ないような挨拶をして引き下がって行った。

ここ、脇之神へ来て、病院本部の勤務者は誰にも会っていない。みんな壕へ入りびたりだろうか。黒田それはなしは、まだ一度も壕へ入っていない。考えてみればこっちが常軌を逸しているかなとも思える。しかし、彼等は壕の中で何をしているだろうか。

もうかなりおそい時刻だろう。夜の更けるに従ってだんだん寒くなってくるようだった。黒田を横にして背中合わせに寝転んでみたが、黒田の体にはすでに温みが失せていた。

明け方近く ひどい悪寒のため、目覚めたが、黒田の心臓からの血液がすっかり流れて、わたしの背中を濡らしていたためだった。

明けて六月七日、兵隊を指示し、わたし自身も枯れ細りの体を駆使して、黒田の体を葬ったのだが、思い出してみると、黒田が着ていた上衣は、わたしのもので、貨物廠の下士官に支えるはずのサントニン錠が入っていたのだ。私物であって、それと煙草七本との交換の取りきめをしていた。いまさら掘り返すこともできまい。

生前、いかに親しかった友であっても、醤油屋の若旦那、黒田はみほとけの存在であり、遥かなる神の

笠に連なっているからだ。

野戦病院の下士官、将校を含めて、黒田の霊に詣でてくれたのは、軍医の飯塚中尉ただ一人であった。平生、黒田黒田と名を呼び捨てて、憎慢に黒田を酷使した上級者や、名ばかりの戦友は、黒田の墓には振り向こうともしなかった。

走馬灯のように想い出される亡き戦友たちが愛おしい。そんな思いで坐っていて、幕舎へ落ちかかる樹木からの雫の音を聞いていると、木内一等兵がやって来た。趾を追撃砲で吹きとばされて入院しているのだ。

「木内、腹がへってやれん喃。バコロドではよかったな。」

と、話しかけると、彼はなつかしげな追想の面持ちでわびしげな笑みをこぼした。

「班長殿、病室のテントは雨が洩って大変です。天幕

が足りんし、何とかならんですか、寝れんですよ。」

と、愚痴をこぼしはじめるのだった。

「それはよく分っているが何ともならんよ。それでは、お前だけでも、今夜はここへ泊りにこい。本部の連中はみんな壕の中だから、俺はごろんの通り、ここを独りじめだ。我々もいつ最後になるかわからんぞ。三人で、あれこれ話をないか。」

と誘うと、木内はその気になったのか、

「ひとまず友人に連絡して来ます。」

と引っ返したが、多分になると、「松葉杖をつきつき、本当に泊まりにきた。

なにとはなしに四面山話に花を咲かせる間、その周辺に幾度か迫の至近弾が炸裂した。

「班長殿が壕の中へ入らんのはなぜだろうと、あち

(284)

こちで話題になっていますよ。何か信念でもあるんですか。」

「なあに、何とはなしに俺は死なぬという自信かな。強みだか、弱みだか、それが頭へくっついているんだ。それが人の目には立派な行為に見えるのかな。」

「でも、死にたくはないでしょうが。」

「いや、浜や中島、三好、弓削少佐、黒田たちが死んでしまってから死んでもいいと思うようになってるな。しかし、中途半端は、やはり恐ろしいな。つまり即死できないで、脚が切れたり、腕がとんだりすることを思うと、人なみに弾丸は怖(こわ)くなるよ。」

「そうでしょうねえ。」

こんな話をしていると、また迫撃砲が鳴り出した。陣地はコンソリー峠付近らしい。闇の中でパッパッと

塩崎兼吉　脚気兼栄養失調病　20.6.15　天神山にて果つ
坂口　次　香川　香川郡　此母故村（男木島）
妹尾　寛　高松市
下村　直

(285)

閃光を放つのが、眼をつむっていてもよくわかる。

「あのトロントロンという迫(はく)の発射音を聞いてみろ。俺は、いつも子どもの頃の八幡さまのお祭りを想い出すんでやり切れないんだ。」

木内は毛布をかぶったままで、わたしの方へ思いきりしがみついてくる。

「木内。毛布をかぶったって駄目だ。弓削(ゆげ)少佐殿は笠置山の壕の中で負傷したんだぞ。」

わたしは笑ったが、木内は言う。

「しかし、負傷して以来、これ以上どこかへ負傷するのがすごくこわくなったわ。毛布一枚でも、気持ちの上ではてなもんやわ、救いになるわ。」

と告白するのだったが、傷付いた人にはそうかも知れない。二人は、いつの間にか砲戦の散る中で眠りこけたら

しい。どちらが弾丸におびえたのか抱き合ったままで、朝を迎えた。でも、本内には、このことを口に出して言わなかった。

朝になっても雨は止まず、三人が体を寄せ合っていても山の中腹の冷気の中では、体温も高まってなかった。本内は跛をひきながら、雨に濡れ、器用に松葉杖を使いこなして、自分の幕舎へ帰っていった。

一七 患者輸送隊

和手小隊に二日遅れ、岡本中隊の主力が、病院の本部前を通過してゆく。最前線の東太郎山、西太郎山の陣地を捨て、地獄谷方面から奥へ入るつもりなのだ。中隊長や安井、長田、山中伊曹たちも、すでに痩せおとろえてはいるが、意気は、まだ衰失していない。

「生田、どうだ。」

と、指揮班の上等兵の彼に話しかけると、生田は眼鏡の底の眼を伏せて笑い、首を横に振って、

「班長殿、衰兵長や中島上等兵のこと、聞かれましたか。」

心優しい生田はわたしを慰めてくれるつもりだろう。

「うん知ってる。」

数回うなづくわたしだったが、またしんみりとくるしのがあった。

「淋しいでしょう。」

「うん。滅多に会えなくても、相手が生きているという確証があれば、またいつか会えると思うし、身辺にいるように思えるんだが、もう駄目だ。俺より先に彼等が死ぬこと自体、思ってもみなかったが、せめて死ぬ現場で見おさめしたかった。何だか物足りずに淋しいよ。」

わたしは偽らなかった。

「万治は、まだかなあ。」

「田中萬治ですか。田中らは、吉本を担いで少し遅れてくるはずです。大へんですよ。この雨と坂道では……」

「うん気の毒だ。それで、吉本はどんな風だ。」

「たしか右でしたか、足を迫で虫ち抜かれて、かなり出血していましたが。」

「吉本といえば、あのバゴの生き残りだろ。惜しいことをしたな。」

もっと色々話を聞いてみたかったが、中隊長の前進命令がかかった。彼等とまためぐり会う機会があるだろうか。あきらめがたい別離の情がわたしの心を去来し、その後姿を追ったが、道はすぐ左へ曲がり、姿はすぐに見えなくなってしまった。

雨を含んだ重苦しい空を爆虫機が轟いてまた夜

がやってきた。そして、自分の命の約束が出来ない明日が巡ってくるのであろう。

荒涼たる山の中の幕舎に、ただ一人、食もなく、友もなく、生も死もない、安易なわたしになってしまった。体は冷え、食物には当分ありつけそうにもない。かろうじて掴まり歩きができるようになっていたので、幕舎の杭に掴まって、木内に会おうか、それとも、ほかの病室へ行ってみようかと思案はしたが胸騒ぎがひどく、とても、そんなことはできそうにないので見切りをつけた。木内に無精に会いたいと思うのだが眩暈のためとても動けないのだ。

それから二日後、雨の激しい夜半、脳症を併発していた木内はついに冥土の人となった。

木内の弔さえしてやることができない自分を恨めしく

さえ思ったが、外科の勤務者に依頼して、わたしの幕舎にできるだけ接近させて、墓を作ってもらった。彼は当番兵として、また友人として、よく尽くしてくれた。

それに対してこたえる誠意は、ただ成仏を祈るのみだ。こんな身内に死なれていくことは堪え難い苦しみだった。

多分し過の炸裂があり、入院患者が四名死んだ。

気分が優れないまま、幕舎に転んでいると、誰かがわたしを呼んでいるように思えた。二度、三度と、たしかにわたしを呼んでいる。傾斜の下の方を見ると、それは恐ろしい形相に変り果てた山口辰次兵長だった。

「おお山口か、よく来てくれた。一体どうしたんだ。えっ」

わたしは、彼の手を握ったが、その手は、氷の様に冷たくて、石のように堅かった。

劇しい下痢のため、中隊からは落伍し、一週間ばかり何も食わず、雨に叩かれながらここに来たのだった。

手静胃腸の弱い奴で、よく薬を貰いにきたことだったが、不憫だ。しかしわたしの手元には、何の食糧もない。わずかの強心剤を与えるのが精一杯だった。

山口を入院させるため、あちこち連絡をとらせたが、医療薬品は皆無、病床日誌すらない。溜り場へ投げ込むに等しい待遇なのである。

任官当時の、あの覇気に満ちたわたし自身がとり返せる日が来るだろうか。あえかな願いを低く垂れ込めた雨雲に托して、わずかな冷静を保つわたしであった。

幕舎下の方で、騒然としたざわめきが起こり、荒々しい人声がする。また入院患者であろうか。またしや晴い影を感じたが、それは、わたしが待ちかねていた島本工兵隊の患者輸送隊であった。

担架の兵は、バゴの橋梁破壊に派遣され、武勲の多かった東条分隊の生存者、吉本正敏と等兵である。太郎山陣地の争奪戦で、迫撃砲弾を右大腿に受け、出血多量のため、意識は混濁していた。明日を約せぬ重態である。吉本を入院させるために、この輸送隊がここまで運んできたのだと思っていたがそうではないのである。患者を入院させずに、中隊を追って来いという中隊長の命令だというのだ。中隊長の気持はよくわかるが、大きい問題だ。無謀も甚しいとわたしは思った。

早速、輸送隊を集合させ、わたしは彼等に言うのだった。

「それで、お前達は、この重症者の吉本を輸送して、地獄谷方面の中隊へ合流するというのか。中隊長の命令だというが、そいつは心配だ。命令も徹底が度を過ごしても困ると思うよ。おまえ達は、すでに本隊から三日も

遅れている。泥濘の中、雨と弾丸を避けての担架の搬送は出来まい。みんなが、苦しみながら運んできた吉本は、お人にも、みんなにも気の毒だが、ここで出血がひどくては回復はむずかしいし、明朝までの命の保証ができない状態だ。ここから先は、担架を運べる道ではないそうだ。そして、行く先は地獄谷、名を聞くさえ恐ろしい地獄の谷間だそうだ。絶壁を這う葛を伝っておりた谷には、むごたらしい友軍の屍で、足の踏み場もないという話を聞いている。現場へ行っていた田井の話だからその通りだろう。とにかく八人もいて、来が三合で三合では駄目。赤痢にかかってのたれ死にだ。お前たちはここで一年余りも初年兵だから、余計にそう思って心配するんだ。とにかく荷が重過ぎる。軍隊内務書の網領九、独断の項、覚えているんだろう。俺が言ってみようかな。

元岡　樹　20.6.2　全身爆創　脇天神？　地獄谷にて死亡
愛媛　新居浜出身

吉田　茂　徳島　三好郡山城谷村　若山
安井　賢　高知県土佐山田町（香美郡）下の村

凡ソ兵戦ノコトタル独断ヲ要スルコト頗ル多シ。而シテ、独断ハ決シテ服従ノ精神ニ相反スルモノニアラズ。常ニ状況ノ変化ニ応ジ、自ラ目的ヲ達成シ得ベキ最良ノ方法ヲ選ビ、以テ機先ヲ制セザルベカラズ……だ。悪いことは言わない。俺が責任を持とう。吉本をひとまず入院させたらどうだ。輸送中　吉本にもしものことがあったらどうするか。慎重に考えてみるんだぞ。」

雨は小熄みになっていた。時折流れる黒っぽい雲が上空を通過するたびに、雨の粒を降り撒いていく。それがぱらぱらっと、頭上の木の葉を鳴らすと、わたしも泣きたいが、輸送隊も決意を迫られ苦しそうだった。

「田中、お前はどうする。この問題を。」

いま降りかかった決断の時をどう処するのか、わたしは、田中萬治に訊いてみようとした。

「はっ。自分も班長殿の言われるように入院を受け付けていただきたいと思います。」

わたしは輸送隊の声として田中の声を聞いたつもりだった。中隊長には悪いが、この八名の苦境を救ってやろうと決心した。

「患者を病室へ運んで、ここへ来て二、三十分位休んでいけよ。」

輸送隊への思いは、今置かれている環境のわたしか彼等に対してなし得る最良の思いやりだと自負していたのだ。

病室へ患者を入れて、一行は戻って来た。長い間の闘いに疲れ、わたしと同じように飢餓に迫られた死の形相が、それぞれの首の上に繋がっているというだけの彼等だった。

森 貞一　松山市港町　20.6.5. 脇天神山にて赤痢
角田 恵　愛媛 松山市新居浜町出身
20.6.3 天神山にて脚気兼栄養失調症に罹り 20.6.7. 死去　入院記録なし
藤田行雄　20.6.25. 脚気兼栄養失調症にて死去
藤原富太郎　20.6.24. 地獄谷にて昇天さる。

この時田中萬治は肌に添えて湿気から守っていた煙草を、胸のあたりから掴み出して、わたしに呉れた。

田中とわたしの再会は、実に七十日振り位であった。髪はぼうぼう。髭(ひげ)と垢(あか)にうもれた顔と顔が、思わず泣けそうになるのだった。こうした喜びのひとときは、その背後に予定されている別離の悲哀を覚悟しなければならないのである。会うは別れの始めとか、彼等は、日の暮れないうちに、少しでも早く出発させねばならない旅の人たちなのだ。

「道中隨分(ずいぶん)と気を付けるんだぞ。また会う機(とき)もあるんだろう。」

と、安易な言葉を吐(は)くわたしであったが、果たして、そんな時節が巡って来るのやら見当のつくはずはなかった。身軽になった輸送隊の八名は、それぞれ別

十川庄三郎　独立歩兵170大隊へ転属（抜10632部隊）
曽根六一

れの挨拶を残して、幕舎から離れて行った。

ときおり、振り返って帽子をひらひらと打ち振る彼等、わたしのすべてを傾(かたむ)けて待ち佗(わ)びていた人との別離、もはや、この世の中に、語り得る、交わるべき友は一人として、わたしの周囲には残されていないように思われる。

八　孤独

いまの今まで、島本隊の者に会える。田中にも会えると、一縷(いちる)の望みを繋(つな)いでいた。それが、生き甲斐であったのに、いざ会ってみると、予定していた言葉さえ伝え得ず、ただ一刻も早く、中隊主力に合流させねばというあせりが先立つまま、追い出してしまった。彼等八名が、木の葉がくれの小径を進み、その姿がすっかりかくれてしまうと、胸底を締めつけるかのように犇(ひし)々と、孤独感に迫られてくる。

山口辰次　20.6.8.　脚気兼栄養失調症にて入院　その夜昇天
伊藤都築　20.6.10　赤痢発病　20.6.20死亡
入院記録なし
梶原恭男　20.6.29　脚気兼栄養失調症にて死す。
坂本太一郎　20.6.22.　天神山にて死す　同上
坂本善平　20.5.15　西太郎山にて右大腿軟部盲貫迫撃砲弾
破片創を受け　ネグロス島FL入院
20.6.21　死去す。

思い設けず、異国の山河に身を置いて、その任務と責任の重大さを受け止めたころの日々が、想い浮かんではいまのわたしの弱さを、せせら笑って消え去っていく。

一夜が明けると、山口辰次も、吉本も死に絶えていた。中隊に続けず、途中で落伍していたという小松忠臣はどうなっているだろう。せめて此所まで来てくれれば声でも掛け合えるのにと、心待ちする佗ひしさ、それに伴って、孤独感はますます募ってくるのだった。

聞くところによると、野戦病院は、立体攻撃を逃れて四度の移動を行う模様である。ここは、もう最前線になっているのだ。しかし、これから先々、担架輸送も出来ようはずもなく、また担架隊の人員の確保さえ不可能なのだ。とにかく、入院患者中、足腰の立つ患者は幸故退院させ、原隊を追及させるのだ。残余の重症者には

森松信正　愛媛　周桑郡壬生川町高徳
20.6.30.　天神山にて死す。赤痢。
松浦義夫　多度郡琴平町　20.6.20.　地獄谷にて全身爆創を受け昇天す。

籾を煎って分け与え、希望者には、青酸カリ（青化ソダ）を分け与えるという。

数日前、馬場曹長が、減らすともなく減らした言葉は、事実となって我々の眼前に展開されるのだ。

天神山への移動を、明日に控えて、弱り果てた体を引きずり、病室へ行った。

迫の炸裂で、無惨な様相を呈した脇天神の斜面は、まるで嵐の後の光景そのものだった。大小の樹木は折れ、あるいは倒れ、薬室前の巨木は、真っ二つに裂かれている。その亀裂の肌目に、薄機関銃の銃丸が三十数発も連ち込まれているのだ。惨めな人間は、その惨めさから脱却しえず、遂に死の憂き目を見るのだろう。

すでに青酸カリは、患者の手に渡されていた。けれども憎むべき敵のカラバインで、蜂の巣のごとくに穴を

開けられて殺されるよりは、自らの手で自らの生命を絶つ方法を選ぶのが賢明かも知れない。

死、そのものへ確実に追い込まれた重症患者たちは青酸カリの使用について、いろいろとわたしに問いただすのだった。

「男なら、何も毒を使わなくても、同じ死の決意をすれば、手榴弾を使うのがいいだろう。いわゆる死生苦楽を倶に出来る、打ちとけて仲のいい戦友たちと抱き合ったまま、一発の手榴弾で潔く散っていくなんて素晴らしいじゃないか。」

わたしは、自分の立場と信念でこのような話をした。その夜は、あちこちの病室から、バチバチと炸裂する手榴弾の響きを聞いた。その都度、わたしは、お前たちは偉い、成仏しろよと、合掌し涙を落とした。

六月も中旬に入っている。その翌日、わたしたちは、命令によって、脇天神を去り、次の中継地、天神山へ移動することとなった。弓削少佐、黒田、木内、山口、吉田吉本たちの眠っているこの地を離れることは、こころの疼く思いだった。うず高く盛られた友らの憤墓、その塚に深い祈りを捧げて、捏くと繁みの裏葉を白く返して吹く風が冷たく頬を打っていく。

「木内、どうしてお前は早く死んだのか。小泉が死んだあの夜、お前は俺と一緒に死にたいと、口ぐせのように言っていたな。俺は、もうすっかり死にそこねて、このネグロスでは死ねそうにないんだ。バコロドの医務室にいたころ、俺が成田さんのお守りを投げ割ったとき、罰が当たって死ぬだろうと言ったな。神や仏というものは誰もの心の中で磨き上げられていく良心さ。お前の言

う神があれば、神風も吹くし、お前だって死なずに救われているはずだ。本内、もうお別れだ。内地の音戸へ帰ったら、俺のところへも遊びがてらに近況報告に来てくれ。」

この言うわたしの前には彷彿として本内が立っていた。

黒田も、わたしの胸に、まだ生きている。その塚へ、先日、差してやった比島田芋は、まだ さみどりの生きを見せ、あたかも二つの眼の様に、雨水を聚めた白い水の玉が、その葉に乗っかってをり、まるで快別を惜しんでいるかのように思える。

「黒田、岡山へ帰って醤油屋の若旦那におさまるんだぞ。俺はいまから天神山へ出発する。お前が偵察してくれた所へ、お前が行けないで、独り俺がいくなんて悲劇だよ。あちらへ移ったら、俺が必ず日章旗を掲げる。そ

こが目印だ。何日たってもいい。待ってるから探してくるんだぞ。じゃあ さようなら。」

もう眼の前には、一条の光明すら残されていないのだ。落伍したと、山口辰次兵長が言っていた小松忠臣も遂に来なかった。小松の来るのを期待しながら、振り返えり振りかえり行く天神山の斜面には、深い霧が閉して、いつになっても霽れそうにもなかった。

たどっていく道すがらは、迫撃砲弾や、栄養失調などで仆れた兵士の屍が、幾百、幾千となく連り、まるでロシヤの画家、ヴェレスチャーギンの制作になった、髑髏そのものであった。

脇天神から天神山への道すじは、健康な人間なら五、六時間をかければ到着できる道程だった。かくすべくもない疲労困憊と、小松を求める寂しさ。そしてこの

累々と重なる死者の中に、しし や田中や中隊の戦友が混じっていないだろうか。そんな注意し働らくのだ。

疔付けがたい感情の困乱と、疲れ果てた心臓の高鳴りに、わたしの歩は、屋々として進まず、実に三日半し重ねて、天神山に辿りついたのである。

こうして居を求めた天神山の谷間にし、迫撃砲の攻撃が迫ってきた。それは、一日一日、勝利を企図する執拗な悪魔の掌でしあった。

ふるさとは 楊 熟る頃や 逃避行

恐しい放心の一夜、母の手料理による馳走の数々に舌鼓を打っている。楊しあり、枇杷がある。釜に煮えたぎる寿き焼きの香り、～～～が、夢はたちところに砲声の轟きで掻き消される。～～しかし、わたしの眼先には なお 寿き焼きの風味が漂っているのだ。

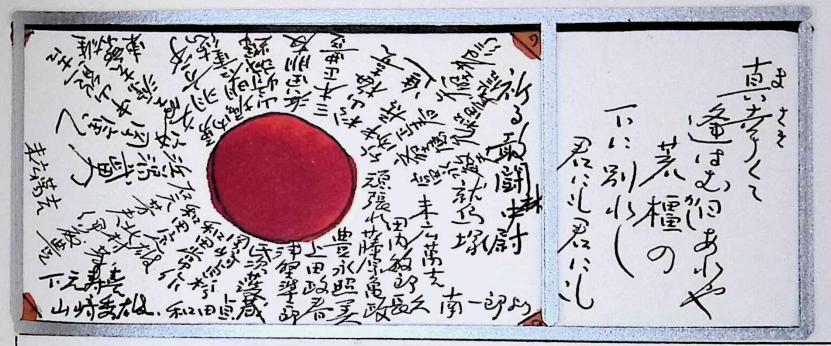
おや、夢には色彩が伴わず、臭しつくはずはない。それは、わたしの暮舎の周辺にいた患者たちの屍の香が立ちこめていたのだった。

ふと、枕辺の木の枝を見やると、そこに結びつけられた白幸袴が翩翻とひるがえっている。風が出たのだ。これは、約束した黒田の霊を迎えるための目印だ。

また、それは、かつて愛した高知陸軍病院第三班の班員たちが、わたしの武運長久を祈って作ってくれた寄せ書きでしあった。

夜目に仄見える、その文字の数々、数々の兵隊たちのその名を読みながら、一人、一人と、その姿や顔を重ねてみる。

思えば、昭和十九年の五月十日、雨降りしぶく陸軍病院の早朝の廊下で、わたしの出陣を送ってくれた



百五十名のなつかしい兵士たち、特に二班の兵隊たちが無精になつかしく、顔、顔、顔がよみがえつてくる。去りがたいわたしの胸の中に、感極まつて、

「淋しいです班長」と、抱きついてくれた山崎秀雄、

「うん、班長も淋しい。しかし泣くな山崎、俺の初陣だ。」と、彼を振り切つてきたわたし。

二、三班の兵隊を伴つて高知公園に遊んだ四月三十日、去年のことだ。五月の空に鳴く蕊を聞いたあの頃、黒い山を背景に、緑のポプラの立つていた練兵場風景、あの頃は西峯軍曹が担架演習に連れて行つたことだつた。などと、最近になく、無精に想い出される内地に想いを馳せていると、何処からか、

「おつ母あ、おつかあ――。」

と、母親を呼び求める患者の声。多分脳症を併発

してしまつた患者であろう。哀愁を含んで、物悲しく、切なく、わたしの胸に突き刺さつてくるのだつた。

わたしは、その声に魅せられ、母の顔を連想して、立ち上つていた。跣足のまま、幕舎を出て、谷合いの落ち葉散り敷くその上に立つた。珍らしく、いやに月が冴えていた。わたしは夢遊病者のように、どんどん前方へ進んで行つた。

蛍が無数に光り、生きている證拠を見せている。雨に叩かれた木の葉が月を反して美しい。そして、ときたま地上に骸骨の入れ歯らしいものがキラキラ輝やいて見えた。What a beautiful scenery 何と美しい光景だろう。ふつと、神戸でインドの貿易商、二ガムブラザーズの社長と、この光景を見ているように思つて英語を使つた。

はじめて、われに返ると、夥しい数の屍の横たわっている山の中腹の小径まで上って来ていた。その時、うす紫の天空と繁みを貫いて、ピカッピカッと、白い稲妻のような光線が駈け渡った。その殺那、トロントロンと気狂い太鼓の乱打を聞いたように思った。山を揺り、地を裂く大音響が轟き、そしてその後に空しい、生臭い硝煙の香が漂う。あたりに飛び散った土塊や石ころが、わたしの全集に降りかかる。もとの平穏に戻ったことを確めて、ゆっくりと立ち上がったわたしの両掌には、迫の炸裂に散った無数の木の葉が、手一杯に固く固く握られているのだった。

一九　脱出

雨び鳴り渡る迫画砲弾を逃れて、わたしは元の幕舎に戻って来た。深夜の山間の湿地帯は底冷えが

する。毛布一枚をかぶる位では眠れそうにもない。さきほどまで母を呼び続けていた患者の声は、もう聞こえて来なかった。多分、命を絶って黄泉の国へ赴いたであろう。静かに更けていく、それは美しい月の晩だ。山肌の月影のつくった縞模様の中ですだいている蟋蟀がとてもきれいだ。

その翌日、ネグロス島野戦病院では、下士官以上に集合がかかった。野戦病院長箕田大尉の話はこうだった。この戦争に勝つことは考えられない。結極我々は敗北するのだ。友軍は当初の八十パーセントの人員を失っている。戦傷と飢餓によって戦闘能力はおろか、生存能力さえ失っている。病院勤務者は戦闘のための要員ではないし、この病院は、医療器具、医薬、消耗品も食料も全くなく、すでに病院としての機能を失っ

ている。同じ敗戦の憂き目を見るなら、これ以上の困苦欠乏に伸吟する必要もなかろう。せめて、特殊任務をもつ野戦病院だけでも纏まって降伏しよう。と言うのだった。

わたしは考えてみた。投降。白旗をかかげて敵の軍門に下る。患者の数は何名になっているだろう。常に兵団長の意に添わず、その責めを問われて自決したとまで噂をされた病院長だが、その間長としてつらいこともあっただろう。部下をこれ以上死なせたくないという親心もあるだろう。しかしわたしは単独降伏には賛成出来ないのだ。誰がなんと言っても。

多数決の原理は、他に求められ得るかも知れぬ全ゆる可能性さえ否定して、その決議方法を唯一絶対の処置であるかに錯覚させてしまうのだった。

野戦病院では、遂に、当面の敵、米軍に単独降伏する決議がなされた。期日は七月一日である。

わたしは少なからず動揺した。巻き添えを喰って、いまの場合、敵に降るのは亡友に対しても良心が赦さない。脱出、そうだ、此処を脱出するのだ。

ひそかに自分の装具をまとめ、脱出の機を考えているのは、わたし一人ではなかったらしい。バコロド患者療養所から、野戦病院付きに移行した、岐阜県出身の纐纈伍長と、旅団作業隊の和歌山県出身、鈴木上等兵がそれである。

病院長の決定による七月一日説は崩れそうになかった。焦りにあせるわたしは、遂に、大きく決意し、それを実行に移した。

昭和二十年六月二十九日、脇天神で死に絶えようとして

勝瀬 正　徳島那賀郡那賀川町古津
池本和躬　北条市中西外村　（新道）と改姓
大西 寿
石原誠臣
安藤竹正
小椋 彰
R. 植田徳次　香川三豊郡庄内村大浜　出身

いたわたしの新たな出発なのだ。その朝、三時に起き出したが、前夜の不安は、確固とした意志の前に統御されており、何の動揺もなく、磨き上げられた心境だった。

谷間は、まだ闇で寒かった。葉末に月光が群れていた。そこから、盤に清水を掬って幕舎に返してきたわたしは、前夜から行動を共にさせてほしいとせがんで、とうとう、わたしの幕舎で泊まっている纐纈と鈴木を呼び起こした。

「おい。いいか、いまから脱出だ。」

低くはあるが、力の入ったわたしの声に、二人は、うなづきをして決意を示すのだった。

「おい。これを飲むんだ。結合の盃だ。」

わたしは真顔でそう言ったが、二人とも慎重な面持ちで、それぞれに盛られた一掬の水を見詰めたのち口へ運

ぶのだった。これから先々、どんな形にしろ、襲いかかってくるであろう数多い苦難に処する我々三人の結合の盃であった。わずかばかりの所持品を背にして、記念すべき行動へ第一歩を踏み出した。

脱出には成功した。しかしわたしたちには、何処へ行くという目的地はなかった。虎穴に入らずんば虎児を得ずと格言に言うが、いずれこれからの行動は、すべてが冒険につながっていくはずだ。一層のこと、二本椰子から、コンセプションへ出てみよう。そして徐々にバコロド入りを目指すのだ。多少のビサヤ語と英語を話せる安易さが、張り詰めていた緊張をほぐすことができた。

屍体から発散する悪臭にも馴れ、山道もかなりの距離歩いたように思った。が、その第一目の日昏れごろ鬱蒼とした森を抜け、やや展望のきく林へさしかかったわ

井出 剛　松山市 樽見町出身 20.6.29. 地獄谷にて死去（赤痢）
井上常助　香川 仲多度津郡白方村出身 20.6.12 天神山にて 左頸部盲貫爆弾破片創にて戦傷す。
太田照夫　香川、大川郡 引田村之通
秋山信之

たしたちは、木立のあちらで、ぬっと立っている人間を見付けたのだ。ギクッとする衝動がして、それが三人の沈黙に移っていった。やがて、鈴木が、

「どうし オーストラリア人らしいです。」

と、最初の口を切った。さき程から見詰めているその人間は、背が高く、髭ぼうぼうで、まとっている服もよくないし、皮膚は真っ黒だ。また濠州兵がここまで来ているとも考えられない。眼付きもそれほどの精悍さがない。

「鈴木、あれは日本の軍人だ。間違いなし。俺に付いて来い。責任もとつよ。」

わたしが先頭を歩いた。そこだけ木立ちの少ない台地に、立っているのは日本人の感じだ。

「どうですか。」

堅田清作　高知、高岡郡葛山村 樺の川出身 左乳房部 左肩胛内部 盲貫迫砲弾破片創にて死亡 20.5.25 東太郎山 南斜面にて。

金子金次　愛媛、東予市 丑止 ニ779 0898(64)4135 左肩胛部 穿通性迫撃砲弾破片創を
遠田 悟　東太郎山にて受く 20.4.7. 手当てをして別れる。天創此
小西 清　20.4.14 一旦台に肩胛間部盲貫砲弾破片創を受く
賀川周治郎　ネグロスト上陸 20.5.18 散華。

わたしが聞いた。

一体彼はなんと返事をするだろう。なぜこんな所で独りいるのか。わたしの好奇心は逸った。

「どちらへ行きますか。」

はっきりした日本語でこう言う謎の人は、航空隊付きの曹長だった。この道中で、生きている友軍に会えたことは嬉しかった。彼は、不思議にも、米や錠剤などの食品を持っており、煙草も燐寸も持っていた。部隊の同僚と後退中、迫撃砲弾の破片で右足背を抉られ、不甲斐なくも戦友に残されたらしい。

彼は創のため、長道の歩行は出来ない。六航通の部隊が張り巡らしていた電線の被覆物をはがして、それで火を起こし、炊事などしているとのことだ。それでよく理解することができた。彼はその煤で黒くなった顔を拭い

もせず、死を待つでもなし、ただ一つの奇蹟を待つて生きのびているのだ。

彼に頼まれるままに、わたしたち三人は、木立ちから百メートルばかりの電線を引きよせた。お礼に米でもなんでも上げましようと言つたが、食料を受けるのは、彼の死を早めることになる、犯罪構成だ。

彼の足背の治療をし、若干の繃帯材料を与え、その代償として煙草の葉つぱを三枚もらい受けることにした。

もう何十日振りだろう。久し振りに味わう本物の煙草に、わたしたちはまるで夢みるごとくに酩酊するのだった。

「いいオーストラリア人でしたね。」

耳元で囁く鈴木の声に、わたしは大声を上げて噴き出してしまった。名残りは尽きないままに、わたしたちは、彼に励ましの言葉をかけ、残し置いたまま出発した。

煙草を貰つたのはありがたかつた、褐色の広い葉つぱに、長い間夢みたアルカロイド・ニコチンの魅惑が含まれているのだった。煙草のせいか、頭がぐらつくが足を早めた。道々の死体の中から小松たちを探し続けたが見当たらなかつた。

ややでりになつた傾斜を進んでいくと、突如として犬の遠吠えを耳にした。大樹の下にしやがんで十数分待つたが犬の位置は動いてない。予想しなかつた伏兵に度胆を抜かれたが、鈴木が手榴弾を投げる格好をしたので、わたしは、首を横に振り、彼を制止した。たとえ犬を殺してもその背後には数多の兵士が屯しているはずだ。

この様子だと、この道は危険だ。命は格別に惜しくはないが、我々が成し遂げようとするこの成果を見たいのだ。

豊 〒771-02
山田 徳一 徳島 板野郡北島町中村
安田 則和
山口 千代志
山中 政雄
安岡 進 高知、香美郡山北村前田

「予定を全然変更して、いっそうのこと東海岸のサンカロスへ出てみようか。」

裸一貫、危険を越え、不安の心さえ統御しさえすればどこの部隊にも所属しない風来坊の三人なのだった。

同行三人は、常に簡単に結論を出すのだ。結極、正反対に西の方向に向きを変えることにした。

もう、すっかり日も暮れている。迫撃砲の炸裂が、森の中に轟音を上げると、それが茂みに木魂してうら淋しい。びしょ濡れの体に悪寒をおぼえる。

どこかで野宿をしなければならないと探していると、犬も歩けば棒に当たるの正反対の現象、わたしたち野良犬三匹は、狭いが雨をしのげる小屋を発見したのだ。

屋根の下で休めるのは何か月振りだろうか。そう言う繽繽の喜びはわたしたち三人の喜びであった。

山の中の夜更けは急速にやってくる。今日も飲まず食わずの一日ではあったが、三人とも事故もなく、この小屋の中で、一夜を過ごせることは実に有難かった。

そして、山峡に朝がやって来た。一枚の地図もなしにこれから先を、どう切り拓いていくことか。他人の話を思い起こしては繋ぎ合わせていくより他に方法はない。わたしたちは、また訪れた今日一日の不安に、強く対処していく決意を固めねばならない。

死体の悪臭が山肌一杯に蒸れ返っている。一刻も早くどこかへ行かねばならない。が、この朝はゆったりと落ち付いていた。昨夜、わたしたちの寝ていたアンペラの下に、一合にも足りない量ではあったが、押し麦があるのを鈴木が発見したからだ。それで糅を炊き、黒人曹長からもらった煙草を喫って十二分に英気を養った。

やがて、擲弾筒一番、装具を背にして出発した。軍用犬シェパードに怖れをなして行き戻りになったが、もう野戦病院付近は通れない。方角を南へとって、峯近い小径を選んだ。ひどいぬかるみだ。ここにも友軍の死体は、ごろごろ横たわっている。小先登りの坂道を登っては下り、下っては登る苦しい行程だった。

喘ぎながら登っていく三人の行手に、突如として広い平坦地がひらけた。米軍機のグラマンの残骸が並立しており、激しかった戦いを回顧させた。が、多分、友軍の糧秣集積所であったのだろうか、爆破で散ったらしい粉から、美しい萌黄色の芽が出て、あたり一面は早緑の絨毯を敷きつめたようだった。珍らしくこのあたりには死体がない。わずか三体の屍の間に餓小ていた蛙を発見した鈴木と縦縞が追っかけまわったが収獲は

三匹だけであった。これがわたしたちの栄養の源となるのだ。

雨は熄んでいるが、あたりは暗く淀み、頭上の樹々の枝から落とす雫が、軍帽に、軍衣に、軍袴に落ち全身ずぶ濡れだ。背嚢から浸んでくる雨水が、更に肌着に下部に伝わり、ひょんなあたりで跳躍していて、ついに引力に抗し切れず、会陰部で合流し、仲よく睦み合ったのち、左右の大腿の内側に分離していく、泣き出したいような嫌な気分だ。

歩いていく小径を覆う茂みが深まるにつれ、道は狭く、路傍に倒れ伏す屍の数は、その姿態をそれぞれに作って水劫の眠りについているのだった。

わたしたちは、この寂しい死の世界の中で、「俺たちは生きている人だ。」と言い得るほどの生気はなかったが

誰からも指示を受けなくてもいいエトランゼの道すがらであった。

巨木の根っこで二泊もしたわたしたちは、病院を脱出以来五日目の午後に至って、精魂も尽きてしまった。栄養失調兼脚気の、言いようもない怠さを押して続けてきた行軍の疲労、山中の露点に達したかの湿気の中で、呼吸は促進し、心臓の鼓動は不気味な程回転の度合いを速めているのだ。ビタミンの不足か、それとも塩分の欠乏によるものか、視野さえ霞のかかったかの如く見極めることが出来なくなっていた。

わたしは羊歯の群生へ俯っ伏せになり、呼吸を鎮めようと努力した。

「やはり無理だった。君たちも体を休めてくれ。」

わたしは、喘き喘ぎ、やっとの思いでそれだけ言った。

数時間も、こうして静かにしていなければならないと思った。草に伏して、早鐘を打つかの心臓の鼓動に耳をすましていた。現役入隊の頃の体重十六貫三百匁も十貫足りずになっていることだろう。心臓の動きはまるで危機を告げる陣太鼓だ。顳顬のあたりへも同じ速度で伝わっている。手足は完全に冷えきっているのに、胸のあたりは燃えるような熱さだ。

この灼熱のボイラーが冷却しきるとき、わたしの体の工場の活動が停止するのだろう。わたしが死ねば、鎖纐や鈴木はどうするであろう。わたしの屍をそのまま残して、ただ一すじに続いているであろう。この泥濘の道を、か弱い足どりで辿っていくのであろうか。

指先へふれる脈膊と、顳顬に感じる血液の奔流が、申し合わせたかのように調子をそろえて流れている。

が、何か、別の流れが、わたしの体の中に入ってくるように思われる。

耳をすまして疑えば疑うほど、全く別個の騒音が起っているようだ　おかしい。一体その音の源とは――

「ザーッ　ザーッ」と、断続的に何か聞える。固唾を呑んで聴き耳を立てても、矢張り外部からの音響らしい。そして、それは、何だか一連のつながりをもっているらしい。どうも森の茂みの向うで発生しているようだ。

がばっと撥ね起きたい衝動にかられたが、わたしは、そうはしないで、仰向きに寝返りを打っただけである。

「鈴木、耳を澄ましてみろ。」

「纐纈にも何か聞こえるだろう。」

わたしは別な表現で、二人に一つの注意を促した。

「本当。何か聞こえますよ。」と鈴木。

「なにか滝の落ちるような音ですか。」と、纐纈の声。

「まあ、似たようなものだ。誰かに聞いことがあった。誰だったか。そうだ。地獄谷の温泉場だ。」

と、わたしが断言すると、

「班長殿は不思議ですねえ、自分が行ったこともないのによく分りますね。」

わたしの予想に鈴木が感心すると、纐纈がわたしに言う。

「今でこそ言いますが、野戦病院が銀杏台にいた当時、斉藤少尉が、藤松という男は俺の言うことには耳をかさんが、あいつは人ぬしで、凄く義理堅くて、記憶力もしっかりしている。それに運がついていて、一度も壕へ入らんのに怪我一つしない。話によると、かつて神戸で外人にすごくもてたという話だ。十六か十七の時にはや

With one voice

通訳をしたら、大学生に論文の指導をしたりしていたというではないか。ひょっとしたら、あいつだけがこの戦争に一人で勝つんではないのか。この戦争中あいつにくっついていれば絶対大丈夫だ。と云っていましたよ。」

「おいおい。それじゃ悪いとこは全然ないじゃないか。よく太っていて色が白くてか。それで一人で脱出しようとしている俺に付いて来たのか。」

わたしは、久し振りに明るく笑った。纐纈と鈴木が異口同音に「そうじゃないですよ」とあわてて否定したが、もちろん わたしは 何も気にかけてはいなかった。

しかし、本当に、ドブさんこと斉藤少尉が、そう言ったとしたら、当らなくとも、何と嬉しく有難いことだろう。それにまた申し訳ないことだ。なぜなら彼とは、

石原 誠臣
加藤 清一
柿本 徳保
金子 金次
合田 政一
新居浜市政枝町甲46の12

河野君雄 徳島 桜麻郡 鴨島町飯尾
〒776 鴨島 4-3393.

単なる上級者であるが故に、形式的な関わりしかもたず心中ひそかに軽蔑していて算に掛けてはいなかったのだ。彼が他人をかげで賞める美徳を具えていたこと自体が、わたしのためでなく、彼斉藤少尉のために喜ぶべきことだと考えたのであった。

「それでは一先ず、斉藤少尉殿と、この事実を伝えてくれた纐纈伍長に敬意を表明しておく。そして、煽てに乗って、地獄谷の話をしてみようか。すぐに出発してもいいが、三人のうち俺が一番参っているので、一秒でも長く休息をとる方がいいからな。

実はこの ネグロス島に一箇所、温泉の湧き出している所があること、すごい谷間にあることを、バコロドのシビリアン(現地住民)に聞いていたんだ。そして脇天神にいた当時、山口部隊の下士官に、ヨサッペの討伐にいた



話や、地獄谷に温泉の湯の川が流れていることなどを聞いていたんだ。とにかく遅々たる歩みながら、われわれも丸四日位こっちの方向へ来たんだから、あの音を聞いて、さては と、見当をつけてみたところだよ。これが種明かし、ところが、もっと種を明かすと、その地獄谷には、千乃至(ないし)二千ぐらいの友軍の屍体が横たわっているはずだ。これは俺の目算(もくさん)だが、そろそろ出発して確かめて見るか。」

地図はなくても、自然は偽わらずに、あるがままの真相を横たえていた。

「ゴウゴウ」と轟くすざましいその源(みなもと)は患者輸送隊が通過して行ったはずの地獄谷だ。一刻も早く到達したいという思いが切実さを加えてくるのだ。肩に喰い込んでくる背嚢の重みも さほどに苦にならず なにか希

望の最中(もなか)に溶け入っていくかの憧(あこが)れと喜びで、足も軽やかに運ばれていくのだった。足元には相も変らず、数百数千の死体や骨格が連っている。この無気味な小径を、夜の暗さが覆(おお)い尽(つ)くしてしまうまで、歩度を伸ばしていく、わたしたち三人であった。

二〇 悪 魔

その翌日、一行は温泉場の入り口らしい地点に到着した。通路の小径は断崖絶壁によって絶たれている。その突端から見おろす谷が地獄谷であろう。谷底から飄々(ひょう)と吹き上げてくる風が冷たい。右手の茂みは神秘を包んで靄(もや)の中に蹲(うずく)まっている。乳白色の蒙々(もう)たる沸濁(ふつだく)の中に、異様な轟(ごう)音を上げているのは、温泉の噴出口であろうか。断崖を下るための、人為的な工作は何も施されては

いない。何の足場さえないのだ。ただ、偶然に、深い谷底まで延びているらし葛が一本、頭上の大木から垂れさかっているのだ。わたしたちは、この葛を体に絡ませて、この断崖を器用に下りねばならない。十二分な用心を重ねてどうにか下に降り立った

夥しい数の友軍の骸骨が、寝姿のままで、雨に朽ちた幕舎の中で並んでいる。迫撃砲の破片で裂かれたらしい天幕の破れから、谷の風が蕭々と身にしみてくる。谷合いに反響する大音響と、朽ち崩れていった数十の無名の戦士たちの白骨の空しさが対照的で、わたしたち三人は、云い知れぬ無情感に打たれ、そこに立ち尽くすのだった。無言のまま、しみじみ思う人の世の醜くさと尊さが全身に透徹してくるようで襟を正させられる。他の二人は首を垂れ、掌を合わせて、深い祈りを捧げているよ

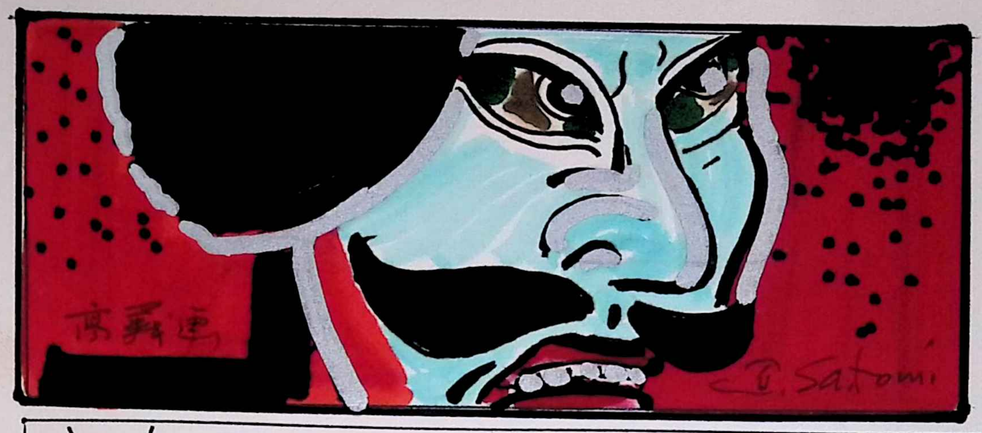
うだった。

あいも変わらず、温泉の憤き出す凄い反響は、また新な反響を呼び、それが互いに反叉し、まさに谷合いは地獄谷の名に應わしい様相である。

「さあ、先に進むんだ。」

同じ感概に耽っているのだろうか。真妙な姿勢で佇立している二人に声を掛け、谷合いへ歩を進めた。

無数の屍は、寂として声なく、累々と横たわっている。ここにもまた襟を正させる光景が展開しているのだ。湯気を吐き上げながら流れていく濁水に、無慮数百もいるだろうか、惨めな姿に変わり果てた屍が、その底ひにも沈んでいるし、殆んどは浮いたり、流れたりしているのだ。全裸のもの、着衣のもの、上半身裸のもの、見渡す限りの屍体だ。



まったく声もなく、この様相に固唾を飲むわたしたちであった。この生温い川底にピラニアらしい怪魚が棲息しており、死者の体を、胯間のものに至るまで啜るという事を知って、身の毛の彌立つ思いをするのであった。

久しい時の流れが移ってのち、鈴木が切った口火からお互いが生きている確証を得るのだった。しかし、まるでこの世の生き地獄でもあるのだ。

「悲惨ですねえ、惨めというのはこれ以上のことはないでしょう。班長殿、この現象は、どう説明したらいいんですか。」

「そうだな。どうせ、この人たちは行く末の長い人たちではなかったんだ。傷づいたり、過労や空腹に耐え切れず、栄養失調や脚気、あるいは赤痢などの人が、ここに通りかかって、おいこの水は温いぞ、これはいいやと

いう調子で、この水に入ったんだろう。湯から上ると、もちろん体は濡れている、雨に当たると悪寒がする。もうすこし入っていようと、水の中に漬かっている間に、長い月日の緊張が弛む、と同時に一層の倦怠感もおこってくる。もう少し湯の中にいようと言う訳で、いつまでも切りなく上れないままで坐っている。そこへもってきて、この水は、ラジュームの含有が多い。多分プロセントが高いじゃないかと思うんだ。そうすると尚更濃度の濃い成分に侵されて、かなりいい気分になって死に絶えていったかも知れない。」

鈴木に、答えにもならない私案、私見を述べると、

「それじゃあ素晴らしい往生ですね、安楽死というのに該当しますか」と、纐纈が感じ入った風態である。

「そうだな。鴎外の「高瀬舟」よりずっといいよ。痛くな

くて、まさに天国へ行く境地だったかも知れんなあ。」

恐らく満ち足りた思いで死んでいったこの人たちを、わたしは羨ましくさえ思いもするのだった。

死は易く、生きるは苦しい、この今の今をはかなく思うが、そんな甘い気弱な考えは、いまの自分には許されない。頑強な鉄木を、これから三人の生命の安全を保証してやらねばならない。

さしあたって食糧だ。飢餓に迫られた土壇場の三人は、何としても食糧を見付けねばならないのだ。

わたしは出発を促した。急激な坂道らしい。疲労困憊はその極に達し、全身は綿のようにくたくたでとろけそうである。男のあたりの虚な感覚を心臓の鼓動が、ずたずたに切り苛んでいるようだ。いくたびか、土に坐って休息をとったが、やがて日も暮れてしまうだろう。雨は

まだ続いている。天空の一角を睨んだところでどうにもならないことだ。いつの間にか小高い丘の上に来てしまった。そこに道しるべが建てられてあった。

「右 希望盆地・左 バンダナウエイ」

と、してある。なるほど、道標の元から径は二本に岐れている。

さあ、すっかり困ってしまった。ここでし責任者としての、わたしの決断を迫られるのだった。ずっと以前に伝え聞いたところによると、希望盆地は、名ばかりの盆地で、食料しない湿地帯らしい。それに、野戦病院の一部の将校が慰労に行ったきりで帰って来ないという噂し聞いていない。何だか行く気になれない。また、バンダナウエイなんて今まで耳にしたことのない名だ。さて右するか、左するか、わたしが口籠っていると、突然、迫重砲弾が炸裂し、あたりに鳴り渡った。

「おや、迫だ。」

と、叶んだ纐纈がその舌を飜えして、

「萬朶の桜か襟の色、花は吉野に嵐吹くという歌があるでしょう。だからバンダナウエイは桜盆地の正式の地名で、兵団の参謀連中が櫻盆地と命名した人ではないでしょうか。」

と、言うのだ。

「うん、そうだ。纐纈、仲々いいことを言ってくれた。すばらしい判断力だ。敬意を表明するぞ。」

と、いい、先日の仇をとった「もりだった。そうして、我々は左のコースを選んで桜盆地へ出る決意を固めた。

人間の運命は奇妙に配慮される神の意志によるのだろうか。このとき、もしわたしたちが右の道を選択していたなら、迫分峠方面に至り、この頃盛人に出没していた迫剥、つまり同じ友軍でありながら日本軍人の衣服や食料を盗み、あるいは殺

害してその肉を喰うために組織されていた強盗の群れに出会って殺されてしまうところだったのだ。

決定通り、わたしたちはバンダナウエイを目指して歩を進めた。連日連夜、それこそ篠突く雨に手足の皮は剥け、体は疲労の極に達した。なお肺然と降り注ぐ雨はわたしたちの背を走り褌にまで流れ込んで来るのだ。幸いにして、迫重砲の音は遠去かり、飛行機の爆音もほんの時たまにしか聞こえなくなっていた。

風が変ったらしい。地獄谷からの轟音は耳につかなくなっていた。しかし、次の難関は千六〇二高地だった。やせ細り、雨にさえ溶けそうな、そんな身を挺して、この坂をよじ登っていくのだ。急峻なこの斜面を登りきるのは一大難事である。

亜熱帯とは言え、高い山の中、しかも雨に濡れている

体は悪寒のため、かたかた震えるばかりだ。

この震えは何をかならないしのめ。全く泣き喚きたい気持ちである。もう一週間何も喉頭を通っていない。衰弱しきった全身、依然、早鐘を打つ脈搏が顳顬に伝わり、心臓は痙きながら高鳴っている。人間の体力には限界があるのだ。幾たびか死を予想しながら這い上っていく急傾斜であった。

あたりの樹々の幹には、真白い黴が一面に這いつくばっている。その樹々の周辺に伏す屍も、迸まる雨水の流れを追うかのように、白茶けて溶け流れているのかほとんどである。何とひどい雨だろう。人間の身も魂をも奪いながら、なおかつ肺然と天空から墜ちてくる豪雨でさえあった。

希望も信念も喪失して、三人は影のような姿と化し、

この洪水の中を、その頂まで這い上っていった。

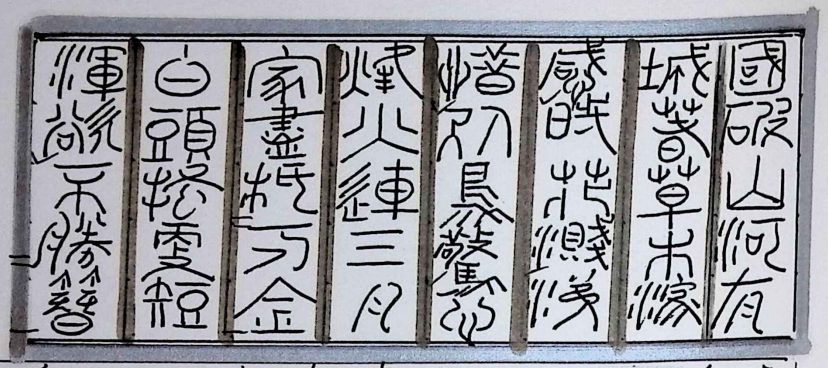
二体の屍が腐って溜りかけている山頂で、わたしたちは、ずぶ濡れの天幕を繋ぎ合わせて、窓上の小枝に張った。日の当れには、少しばかり間があるとしても、もはや一足先へも前進できそうになかったからだ。

このような場合を考え、脇天神岩時から持ち歩いていた薄い板の切小端と、ゴム布へ巻き込んで保存していた燐寸とで火を作り暖をとった。生木を割り割り、火を太めていっても、体の芯が暖まってくるには長い時間を要した。ここで、わたしたちは、地獄谷の戦友たちの死体の間で剝ねていた小さい蛙を、一匹ずつ分け合って食ったが、これが、ここ一週間に一度だけの食事であった。そして、それは、翌日、いや、あと幾日か続くかも知れない日数のための活動源でもあった。

広い世界にわずか三人だけの、うら悲しい一夜が明けて朝を迎えた。けれども雨は降り続き、見仰ぐ空からは、当分、雨が止むという予想は生まれて来ない。一日も早く、青い空を眺めて見たい。この裏えた体に巣喰って蠢く微細な生き物、わたしの肌着に付着した執念深い小動物を、さんさんと輝やく太陽の下で殺してしまいたい。左右拇指の爪の背と背で、思いつきり、ぷちぷちと押し圧してやりたい。わたしたちの体には無数の虱が湧いていた。

が、いくらわたしたちの精神力でも、この篠つく雨をおして出発するほどの勇気は湧いてこない。結極その夜は同じ場所でまた一泊することになってしまった。けれども再び迎えた朝も真白な雨で霞んでいた。あたりにさまよう乳白色の霧の中へ百分の一秒

國破山河有
城春草木深
感時花濺淚
惜別鳥驚心
烽火連三月
家書抵万金
白頭搔更短
渾欲不勝簪



すらの間隙だにおかないで潸潸と落ちてくるその雨を瞠んでいるわたしたちは、飢えと寒さと空しさに、泣き喚きたいような衝動にさえかられてくるのだった。

この同行三名の遍歴者中、最若年であるわたしであったが、形式とはいえ軍隊社会では上級者であった。従ってこの行動に関する限り、すべての責めを負い、纐纈と鈴木を安全に誘導し、そして最後の人間の生きざまを見せねばならないのだ。この場合、立場が逆であれば、見栄も外聞もなく、憎むべき天空の一角に向かい、拳を固めて号泣したに違いない。

事実、今にも泣けそうであり、自らの命を絶つ方が気楽でもあった。しかし流石に軍隊はその責任の所在を明確に自覚させる社会であるのだ。

「よし、此所まで来たからにはこの二人を自分の命に

代えても守り通してやるぞ。」

この思いは、計りしれない重みをもって、わたしの決意として固まってくるようだった。人間の信念は究極の苦悩に対処しなければ、その確固さを持し得ないものらしい。

「おい　ここは年から年中　雨の熄(や)まぬ所らしい。晴れるのを待ってても遂に餓死するばかりだ。元気を出して出発しようよ。」

この声で二人も立ち上がる気になった。天幕を払うとき、近くで迫撃砲の音が聞こえた。長い尾(お)根をつたっていくと、どこの部隊か、兵隊が五、六人木の下で話し合っているようだ。

「どこへ行くんだ　君たちは。」

わたしの声へ、中の一人がこちら向いて答えた。

「はあ、もうバコロドへ出ていく決心です、何か食わないとやり切れんです。腹一杯食えば本望ですから。」

何れの兵隊も、五十歩百歩　わたしたちと同じだ。わたしは彼等に与える助言もせず、ただ御安全にと言ったに過ぎなかった。誰だって人間だ。人間らしく扱ってもらえねば、無謀な策も考え出したくなるだろう。

わたしたちは歩を伸ばした。何か自由という観念が深い霧の中へ拡散(かく)されていくようだ。こころがひとりでに爽快(そう)になってくるのはどうしてだろうか。

「少し休憩しようか。」

暗黒の空はただ雨を落とすだけだ。が、周囲はすべて霧に閉(とざ)され、遅(あた)りの茂みもこの中で沈黙を守っている。

「霧にさまよう不思議さよ、茂みも石もわびしげに、木々も　互いに見え分かず　もの皆なべて孤独なり。」

と訴じるわたしの声が尽きると、縦纈が、ヘッセの霧の中ですね。全く今の眼の前の情景そのままですね。」と、何かをなつかしむかのように言う。すると、鈴木が

「いまごろ よくもそんな詩が出ますね。」

呆れたと言うより、不満そうな口振りでもある。鈴木にしてみれば じれったい感じでもあろう。

「そう言うな鈴木。軍人頑くかくあるべしだ。人間は、どんな立場、どんな状況下にあっても、心の中には或る程度の裕りが欲しいもんだ。所謂、動中静、静中動だよ。今の詩は、ヘッセの詩の中で最も有名なやつで此の岸の徒歩旅行の最後の詩行だと思うが、いい詩だ。いまの我々の状況で、いまこんな場面へ出喰わすと実感はまた格別だな。」

「それでは、物も受けとり方 次第ですねえ。」

縦纈（岐阜県出身）
鈴木（和歌山出身）

case.

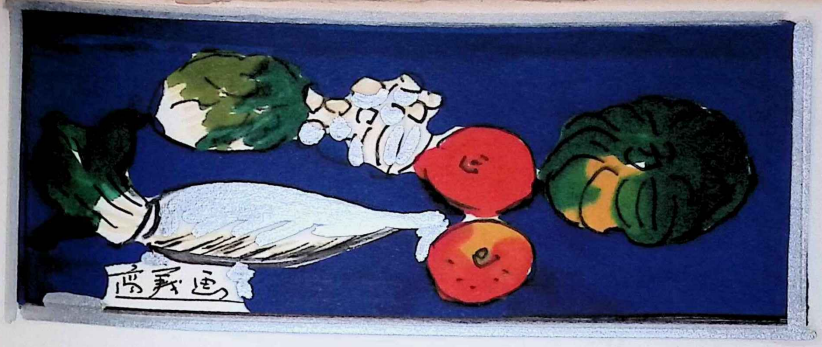
「もちろん、そうだとも。この大きい戦争で、我々三人が敗北して落ちていく、明日の命も約束はできないけれどその日その日に直面すること、それをどんなに処理するか、そんな事例の一つ一つが自分の心の糧になっていくんだ。俺はそう信じている。」

「そう言えばそうですねえ。」

「そうだよ。本当だよ。」

わたしは、そう言って会話を締めくくり、そして出発した。

行く手には、幾百千の屍が畳々と連っていた。尾根づたいに進んで行くと、やや下りの傾斜になっていて体には楽であった。ここで鈴木が迫歩破弾の破片創を右足背に受け、その部位を抉られた。鈴木と縦纈は、すでに靴さえ履いていないのであった。足を抉られた鈴木は、この雨の中、荒れ果てた山中の小径を裸足で歩くことは無



理である。わたしは靴を優いていたが、鈴木の巨大な足には役してし収まらない。

鈴木は靴を探していた。辿っていく小径の両側に仆れている屍体の足ばかり点検している。その中に大きい靴を優いている死人がいればしらつしりなのだ。万一、創が化膿でしすれば大変だからである。でしナ一文しある巨大な靴は滅多に見つかろうはずがないのだ。

ぴよん、ぴよんと跳ねる格好で、先へ先へと小走りに坂を下っていく鈴木の姿は、曲りの繁みで見えなくなった。しかし心なしか、雨が小止みになってくるようだった。緊張とわたしは、ゆっくりと歩いていったが、木末に見える空の色に、かなり明るさを見てとったからかも知れない。と、突然、

「班長殿 助けてください」

Anybody hurt you!

鈴木の悲鳴らしい。傾斜のあちらだ。

「何だろう。追剝かな」

不安に胸を騒がせながら坂を急いで下るが鈴木の姿はない。ほとんど白骨化した屍の群れの中に、追剝など出ようはずしない。多分そいつが潜伏していたとしても、付近で山なす友軍の死骸を眼にするだけで、悪心を翻して、善意の人に立ち直りそうなしのなのだ。

が、鈴木は、ゆるい曲りを曲りきった場所の大木の下で青い顔を一層青くして立ち尽くしていた。死人は幾百しも並んでいるが、生きた人間は、彼をおいて他に誰しいない。

「鈴木、どうしたんだ。」

わたしの性急な問いに、

「これです。これです。動いたんです。」

と云い、かたわらの屍を指さした。

その死体の上半身は、大きな樹の根の向うになって見えない。下腹部から足先までがこちらへ見えている。鈴木は大きな靴を見付けて、よしもらってやろうと、紐を解き引っ張ったらしい。ところが、てっきり死んでいると思っていたその人の足が、ぴくぴくと動いたのである。

「それじゃあ　まだ生きているんだよ、この人は。」

「その人に相談してみろ、靴を欲しいと。」

纐纈も口を添えた。木の根を越えたところに、その人の上半身があった。死に絶えていこうとする一個の生命に抱きついて、共に泣き、共に悲しんでやりたい心境だった。不憐なこの人も故里(くに)では人の親であり、人の夫であろう。

結核(けっかく)や栄養失調は死のほんの手前まで意識がはっきりしている。飢餓と寒さに眠ることも出来ず、

そのまま来たるべき時を待っているのであろう。

骨と皮ばかりの顔の中で、ギョロギョロした二個の眼が見開いていた。鼻が高く隆起したあたりは、コレラの患者を見るかの印象だ。鼻翼呼吸がかすかになされ、顔面蒼白、瞳孔散大、高度の貧血、そして、すでに顔面に発生しかけている斑(まだら)が、やがて訪れてくる死を象徴しているのだ。

「おうい。」

耳元の叫びへ、やや首を動かせる重症者である。恐らく視覚は失っているのであろう。何か口を動かしているらしい。

「生まれはどこだ。」鈴木は耳元へ口を寄せて盛んにうん、うんと言っているが、何か通ずるものがあったかも知れない。

「よし、よし、分った、今ったよ。」と、鈴木は意志のコミュニケートを終ったようだが、「生まれは九州、殺して肉、肉」といったということである。

雨に打たれながら、もはや、舌を噛み切る力も失せ散大した瞳を動かせて、釜を哀願し、その代償として、自らの肉を提供するというのだ。殺して、彼を自由な天国へ届けてやりたい。そんな気も多分にするが、もう数時間後には昇天するであろう。

何処ともなく夜はやって来た。天幕を繋ぎ合わせて、わたしたちはその中に入った。わずかに落ちている雨が聞こえる。下手の木立へ、自動小銃がひびいている。いましがたの一件もあってか、暗い闇の中で毛布をかぶって、寒さに対処したが、何かすっきりしないものが残っている。誰か話しかけてくれればと思う

が沈黙を守っている。そうかと言って、わたしから話し掛けるほどの元気もない。声を出せば、その分だけ体力が消耗することを誰もが心得ているからである。

夜が更けて、あたりは一寸先も見えない。思い出したかのように、軽機関銃の連続点射が唸ったりする。全く淋しくて空しい。次第に募る孤独感に、全身が凍結しそうだった。

もう何も考えまい。生きとし生けるもの、すべて滅亡するのだ。生者必滅、一日たりとも長く生き延びようとする心、富貴名聞、人より優位になり人より幸福になろうとする思いも妄執なのだ。早く眠りたい。つとめて雑念を抑えてみると、妄執の消失していった後は背筋に走る冷たいものと、胃の鳩首のあたりに感じる空虚なものが残っていた。もう夜中になったらしい。

「鈴木」
わたしは上等兵を呼んでみた。鈴木は頑強に起きて
いるのだった。
「すまないが、さっきの兵隊の所へ行ってみてくれないか。生きているか、死んでいるか、それだけでいいんだ。」
鈴木は、一つ返事で出向いていった。一寸先のわからぬ闇の中を、這うようにして行き、例の男の生死を確かめてくるのだ。そこへ行き着くまでには幾体かの死体もあるはずである。間違えずにあの男に辿りつく、体にふれ、胸に耳を当て、心音を伺うのだ。わたしは彼が早く、確実に死んでいてくれればと、ただそれだけを願っていた。あの人の、死に至るまでの過程が余りにもやるせないからである。
間もなく、鈴木が帰って来た。

「どうだった」
わたしが聞いた。声のした方へ、鈴木は這い寄って来て、
「はい。死んでいました。今死んだでしょう。体温は残ってるかなという位でしたが、息は完全に止まっていました。」
「そうか。御苦労だった。彼も救われただろう。俺も救われた。これで眠られそうだ。」
鈴木の報告に安心して、わたしは毛布を被って目を瞑った。不思議にも何の不安も迷いもなく、すぐ眠りに陥ったようであった。
明くれば七月四日。珍らしく一番先に目覚めたわたしが二人に起床をかけた。装具を背に、雑木を分けて少し進むと、昨夜出くわした例の男の屍体へ行きか

かった。

「成仏しろよな。九州へ帰るんだぞ。」

手近にあった灌木(かんぼく)の枝を手折(たお)って、夜中の十二時かっきりに死んでいった男の胸の上に、それを載(の)せてやった。雨に濡れていたが、これが、この死者に対してできるわたしの最善の供養だった。

「おまえたちも何か言ってやれ。」

纐纈も鈴木も、ひざまづいて深く祈りを捧げた。が鈴木は、神妙なことに泣いていた。前夜、わたしの要請によって、死を見届けただけで、そのように愛惜(せき)の情念が働くものであろうか。

「さあ、行くぞ。上を見ろ、かなり明るくなって来た。バンダナウエイも もう近いぞ。」

陰惨(いんさん)なこの逃避行(とうひこう)ののちに、青空を見、そして日

杉本未喜　愛媛　上浮穴郡三川村上川
20.6.15. 浅間山にて脚気兼、栄養失調症にて昇天
篠原豊次郎

光を体一杯に浴びられるという憧(あこが)れが、強烈に、わたしたちの士気を高めてくれるのであった。

鈴木が先頭を切り、そしてわたし、後へ纐纈が続いた。一行は下り坂では歩度を伸ばすのだ。第一目標地点まで行けば、生きている友軍の誰かに会うこともできるであろう。こう考えると足も軽やかで快よかった。だが、ふと振りかえると、纐纈の姿が見えない。どうしたんだろう小用かなと、遥(はろ)か後方へ眼をやると、彼は立ちすくんでいる。しかし、そのようすがすこぶるおかしいのだ。

「おい、鈴木、少し待ってくれ。」

鈴木の足を止めて、わたしは急いで引き返していった。纐纈は、昨夜の死人の前でうなだれている。しかも刀まで抜いているのだ。

「どうしたの。」

わたしは様子(ようす)がのみこめないので、軽く声を掛けた。
纐纈は泣いていたらしい。そしてわたしに訴えるのだ。
「軍曹殿、実に浅ましいですが、この男の肉を儂(わし)に
食わせてくれんですか。本人も生前、そのことを承知
の上で我々に要求していたし赦してくれると思うんです。」
彼は本気でこう言うのだった。彼、纐纈も病気上が
りで見る影もなく衰弱し切っている。今の今まで、わた
しの言うまま、なすがまま、何の反抗も示さず、死生を
共にし、苦悩を共にして来た戦友だ。その彼の、ぎり
ぎり決着の申し入れなのである。
「よっし、食わせてやる。」
怒りと嘆き、そして同情の混同が、一瞬、わたしをし
て、刀の鞘(さや)を払わせたのである。
刀は、黒田伍長が、生前に、私に呉れたものである。

無銘ではあるが切れ味はすばらしいとのことだった。目
標の屍は、襤褸(ぼろ)を纏(まと)い、四肢は枯小枝のごとくに固く伸
び切っている。破れた軍袴から黒く汚(よご)れた褌(したおび)が覗(のぞ)いてい
る。と、胸の上にさきほど自分が載(の)せた木の枝がそこに
ある。雨水が小さい葉の上で移動した。あっ、いけない。
わたしは俄(にわか)に混乱してしまった。葉っぱに乗っていた水
滴が二つ、突如として球を作り、怪しげな光を放って、
爛々と輝やくではないか。そうだ。それは、脇天神で
黒田伍長の霊へたむけた比島畢(いし)の上に轉がっていた
水滴と同じ大きさなのだ。しかし、脇天神のあの水滴は
双(そう)の眼に涙を浮かべ惜別に堪(た)えぬといった、うるんだ輝
やきだった。しかしこの水玉は、怒りと反抗の意志に
呪(のろ)い喚(わめ)く二つの眼の光りとしか受けとれないのである。
両眼ともみえる二つの水の球は、さらに険悪を見せ、

「悪魔、悪魔、貴様は[illegible]だ。」と罵っているのだ。

「だめだ。」

わたしの体の硬直がまるで水母のように軟化したとき、はじめて人間本来の感覚が蘇ってきたのだった。

「纐纈、俺には、烏のようには、屍を啄むことはできない。こころが乱れて斬れないんだ。もう少し辛棒してくれ、あと二、三日、桜盆地へ出ても、何も食う物がなかったら、俺がこの刀で腹でも切るから、この肉を食ってくれ。痩せてはいるが、鉛木と二人で処分していいぞ。何の遠慮がいるものか、食ってくれよ。」

わたしは真剣になって、彼を説いた。けれども、わたしは、そのことを、部下に対する当然の義務だとは考えてはいなかった。

「さあ、もう少しだろう、行こう。」

と、わたしは二人を促し、そして、先に立って下っていった。

二二 桜盆地

名知れぬ大樹の、遥かなる葉末に、ちらほらと見えはじめた青い空、白い雲、そして太陽の匂いに、我々三人は一層の活気を得て、痩せ衰えてはいたが、その意気は天を衝く思いであった。もう頭上からは雨や水滴は落ちては来なかった。頬を吹く風さえさわやかに乾ききっている。三か月振りに巡り会えた日向の匂いに、わたしは上気し、列の先頭に立っていた。しばらく行くうちにわたしたちは、小径の右側に刈り取られている芋の茎を発見した。それも刈り上げられて、さほどの日数を経過してないものらしい。

「おい、見ろ、ここにこんなものがある。新しい芋の

墓だ。きっと近くに甘酒があるんだ。」

大声で喚くわたしの声に、三人の顔にも喜びがあふれていた。しげとその墓を見凝めるうち、感慨、堪えない思いがこみ上げ、眼頭が熱くなるようだった。

「さあ、しっと歩こう。元気を出して笑って行くんだ。」

元にも増る心地とは、こんなものであろうか、三人は歩度を早めて、どんどん坂道を下っていった。

昭和二十年七月四日、十一時四十分、ついに、わたしたちは接岳地の見える茂みの切れに到達したのだ。この三か月間、日光さえ見られない山中の湿地帯から脱け出して、ここに元入渡る空間を発見し得たのだ。

感激にくる安堵の感情が、わたしたちの身心を完全に骨抜きにしてしまったのか、三人は呆然としてその場に崩れてしまうのだった。

自然の風物は敵意も反抗も示さず、ただ一すじ生きている現実の姿をもって迎えてくれる。かつて敗亡たちが日本軍に追いつめられ、かくれ棲んでここで開墾したなごのであろう。巨木が倒され、切り株、焼き株などもそこにあった。

さわやかに、風は緑の樹々や草原にそよぎ、まるでコバルトを溶かせたかの空は、高く広くどこまでも続いている。その遠くに霞むは、シライ山やカンラオンの雄姿。そして手前に白樺風の木々の連なり、美事な光景が視界に展べ拡げられている。六、七羽の燕が、盛んに呼び交しながら飛びまわっている。ああ、さんさんと降り注ぐこの陽光の中で、黙って死んでゆきたい。こんな思いも一瞬、わたしの脳裡を掠めていった。

けれども、安易な感傷に浸って時を過ごす訳にはいか

ない。とにかく、この付近一帯の状況を把握しなければならないし、それが先決だ。二人をそこに残して、わたしは抜刀し、偵察に出向いた。

小高い傾斜をよじのぼって、台上へ首を出したとき、わたしは Capitaine（キャプテン）と呼ぶ人の声を聞いた。同時に足元の草むらにうずくまっている黒いものが手を上げた。ヨサッペ＝敗逃＝らしい。しかし、それは動こうとしないのだ。

「おい。」

力を左手にこめて掴（つか）み上げると、意外や、それは島本隊の被服係、生田亘（わたる）上等兵ではないか。

「おい、生田、生田じゃないか。今頃こんなところでどうしたんだ。」

いぶかしげに聞くわたしであったが、彼はひどい下

痢と発熱のため弱り果てているとのこと、毎日ここで休養をとっているらしい。そして、何たる機縁か、島本隊の残存者もまたこの盆地に集まっているというのだ。

生田は自分の寿命を知っていた。近づいた恐への恐怖に堪えられず、衛生兵の勝瀬を呼んでいたのだ。「勝瀬」と呼ぶその声を、「キャプテン」と聞き誤って、独り緊張した訳であるが、キャプテンとは、太尉、船長、艦長に相当する英語であるほかに、ヨサッペの間では、自分自身より世智に長（た）けた人、階級が上位にあたる人を稱していう呼び名であるということを知っていたわたしの取り越し苦労に過ぎなかったのである。

しかし、予期せぬ場所で、予期せぬ時機に、元所属中隊の戦友たちに再会出来ることは、感慨も一入（ひとしお）であった。わたしたちは、とにかく、この中隊に合流するこ

とになったが、門司出港時の中隊編成人員百八十名は三十名足らずになっていたのである。

中隊長、島本中尉に会い、現在に至るまでの経過を細々と話し、継続伍長、鈴木上等兵の受け入れについて礼を述べ、内諾を受けた。

島本隊の生存者は、下士官、兵とも、髪や髭は伸び放題、垢と悄悴で見る影もなかった。田中萬治も生きていた。あの脇天神通過の際、担架輸送の古木患者を入院させてなかったら、恐らく輸送隊の八名、患者一名、計九名は全滅していただろうと、述懐するのだった。いずれにせよ、田中達あの八名が無事に生きていることは、わたしを十分満足させた。一別以来の苦労を語らい、そして、かつてよき時代の想い出話に花を咲かせて楽しい事であった。田中は、わたしのためにと保

管していたらしい煙草をくれ、彼には懐中時計を与え、桜盛地での面会の記念としたのだった。

指揮班の鉄力小屋に返してくると、そこには植田兵長、東条兵長、三木、勝瀬たちの昔馴染みがいて、わたしたち三人の脱出者、いや救入者は、心ゆくまでの御馳走にあずかった。考えてみると、このふかし芋を食うのも、芋の葉っぱ汁を啜るのも、実に三か月振りになろうか。勝つこと、任務を遂行すること、また、この食料にありつかんがために、耐え忍んできた長い苦難の夜と昼を振り返るとき、思わず溢れて落ちる涙を抑え得ないわたしであった。

三二 カマリスク

明けて※七月五日、中隊長以下わたしたちは、先発隊徳久少尉以下十名が、待っているというカマリス

クへと行動を開始した。出発にあたって、生田等歩行不能の患者三名と三木衛生兵を残しておくことにした。この行軍は、疲労困憊が限度に達しているわたしたちにとっては、生涯忘れることが出来ないであろうほどの難行軍であった。この世界で、体験をなし得る最大の困苦欠乏を耐え抜いてきたはずのわたしたちであったが、その行く手には、さらに高く、さらに深い山峡が連なっているのだった。

カマリスクへ行けばCarabao（水牛）が食えるそうだ。誰言うとなしに伝わって来たこの言葉は、一行に、強大な刺激を与え、エネルギーを賦与したらしい。苦難の山を幾つか越え、道なきジャングルを踏み分け、野営予定のバナナ林に辿りついた頃には、日もとっぷり暮れていた。

どこかで鳴る迫撃砲、これに呼応して、一しきり鳴った雷鳴の直後、盆を覆えす勢いで驟雨がやって来た。スコールにすっかり慌てふためいたが、バナナの葉を葺きおろして、屋根を作り、大火を焚いて暖をとり、狭い裸体を比べ合っては談笑する兵隊たちは楽しげであった。夜が更けると、スコールは本降りになり、明け方になって、無気味な自動小銃が雨にかわり不安な一夜でしあった。

朝になると鉄砲もなく、美事な快晴が頭上にひらけてきた。洗えた空に米軍の輸送機、グラマンであろうが盛んに往来するのが見られた。これを見るわたしたちは、日本軍がどんな戦況か、残存戦力はどうか、我々は将来いかに生くべきか等の話題は必要でなく、この日は付近の草原を探索し、あるいは林に分け入って、バナナやドリアンの採集に熱中するのだった。

ここでの三日間の休養で、過労を癒やしたわたしたちに出発合図がなされた。広い草原を渡ると夕ボラン地区だ。砂糖きびがすごい糖分を含みながら成長しており、手早い兵隊たちが駈けつけては手折り、そして急いで列中に戻る。その格好が人なつこくて微笑ましい。わたしにはそんなことがどうしてもできない。固苦しく仕つけられて来たせいか、そんなことも生存のための躾ではないのか、などと思ったりしていると、ふっと故郷の母や兄のことが浮かんだりする。

やがて大川だ。正式にはバゴ河に注ぐ一支流とでもいうべきか。山口部隊はこの付近に分散しているらしい。纐纈・鈴木は、岡本中隊長に気兼ねをもっており、ここで離隊して山口部隊へ合流したいと言いだした。わたし自身も、野戦病院付きだが、行きがかりのうえ

わたしの前所属中隊に合流したのであって、正式には野戦病院がわたしの原隊である。従って、わたしにも気兼ねが無いわけでもなかった。

山口部隊は、関東、中部、近畿等の出身者で編成されており、生存者も割合多く、どちらかと言えば、岐阜出身の纐纈、和歌山出身の鈴木にとっては、この山口部隊に編入させてもらうことが、利益を得る上では好都合であろう。

わたしたちトリオは、ここで別れることになった。しかし、再会出来ようとも考えておらぬのに頼る単純な解散であった。姓のみ知っていても、お互いの名前は聞こうともせず、告げようとももしなかったのである。彼等二人は、山口大佐への、わたしの哀願により、希望通り山口部隊への編入を承認されたのであった。

※Usaffe 敗匪

大川を渡り、牧場地区、大谷を経ると、カンラオンが麓まで手にとるように見える。浜、中島、そして中岡たちに、この雄壮な大自然の光景を見せてやりたい。死に絶えていった多くの戦友たちは、どこに安住の地を求めただろうか、それ等の魂は、立命の杖を何れの地に立て得たであろうか。山の彼方の空遠く、今は亡き戦友の顔、顔、顔を、はろか山頂の雲の中に描きながら、わたしは、島本中隊生存者の群れに入って、その列中をひたすらに歩み続けていった。

カマリスクに到着したのは、七月十一日、正午を少し過ぎた時刻であった。※ユサッペの棲んでいたらしい粗野な草葺き小屋に分散し、当分このあたりで生活しながら情況を窺うことにしたのである。

カマリスクにおける当初は、平穏そのものであり、

食品にも恵まれ、当時のわたしたちには、極楽の生活にさへ思えるのだった。しかしこの付近も、間もなく、米軍の観測機が低空飛行を試みて、偵察を開始することになった。恐らく、どこかに潜伏中のヨサッペに連絡することになろう。

中隊の地獄谷通過以後、爆患や、伝染病、内科疾患による犠牲者に、山中軍曹、松浦、藤田行雄、井上、井手たちがあり、和手曹長以下二十数名の行方不明者が出ていた。そして梶原の生死不明もそのまま決着がつかぬままであった。小松忠臣も遂に姿を見せなかった。眼の澄み流えた小松よ、いつの日か、どんな重傷を受けていようと、中隊へ、わたしのもとに帰って欲しい。

生存者のみ、集って生活しているカマリスクでの生活は、体力回復のための素地作りの明け暮れでもあった。

徳弘忠美 19.7.10. 経理 102師工兵隊本部へ転属する

バナナ、ドリアン、カモテ、カモテカホイ、タンコン、マイス、南瓜、胡瓜等も探せば手に入り、体力はかなり回復して来た。

或る日、わたしは、中隊長の要請で、桜盆地へ赴くことになった。

桜盆地へ残留させている、生田上等兵、吉兼一等兵、松岡一等兵と、付添人、三木衛生兵をカマリスクへ連れかえる任務である。

道中にはヨサッペが出没し、桜盆地は奪取されているかも知れないという噂が拡まっていた。中隊長も案じて、一個分隊の兵員を伴って行くようすすめてくれるのであった。が、龍重を受ければ、兵器弾薬のない我々は皆殺しになるであろう。敗匪に感知されないためには極く少数に利点がある。結極、わたしは、森岡上等兵

と杉村孫一一等兵の二名を指名した。二人は中隊きっての頑健ものであり機敏性を具えていたからだ。

携行品は限定した。森岡は小銃一挺(ちょう)、わたしが手榴弾一個を持ち杉村はフリーとした。

「さあ行くぞ、御苦労だが頼む。」わたしの決意は、すでに森岡、杉村にも伝わっており、二人の眼光さえ頼もしい。

通りがかりの植田分隊で、いやに張り切ったわたしの大声が怒鳴(どな)る

「おおい、みんないるか。いまから桜盆地へ行くが、もう帰ってこないかも知れない。俺の顔をよく覚えていてくれ。」

「まあ、縁起(えぎ)でもない。とにかく気を付けていってきてください。松岡がこの分隊へ入るようですから、帰って来たら御馳走しますよ。」

と、植田兵長がお人好しの本性を表明してくれる。吉田茂、渡辺勝安い小屋の中から激励してくれる。それらの声に応えて歩き始めると、後から呼び掛ける声がする。そこに田中萬治が立っていた。田中の物思わしそうな顔に当惑したが少々すまない気もする。

「なんだ萬治、そんな顔して、おまえも連れていきたかったが、中隊長と相談しての人員決定だ。今度な。」

でも田中は、その声には答えないで、

「これは昨夜作ったものです。」

と、包みを渡してくれる。重みから判断すれば、甘団子が何かの弁当のつもりであろう。

植田兵長は、太郎山で、隊を離れ、生死不明になっている谷中隊員の分隊を引き受けている分隊長勤務だった。この分隊に、湊、中島が戦死、伊藤、堅田、森、西森等

戦死、戦病死、行方不明などで人員が減り続けているのだ。戦友を失った悲しみを慰める言葉もなくて、わたしは、時折りここの班に出入りし、残存者と親交を結んでいるのだった。

カマリスクで半月ばかり、休養をとり、栄養分を摂取したためであろうか、我々三人は足どりも軽く、目的地めざして歩を進めて行った。正午前、大川の畔で休憩をしていると、山口部隊長が「どちらへ行くかな」と、口をきかれた。

「桜倉地へ患者を迎えに行くところです。」

と、わたしが答えると、隊長は、

「ほう、それは御苦労だね。」と、言われ、親切に近道を教えてくれるのだった。この度で二回目の出会いであったが、映画や雑誌の口絵でも見たような、徳

川光国公の感じで品性の高い風彩である。高い徳望を具えておられ、友尊はもちろん、ヨサッペの将マタ中佐からも尊敬され、かつては花巣を贈呈されたという話を誰かに聞いたことがあるが、まことに立派な紳士でもあった。わたしたちは、深く敬意を表明して出発した。

大川を渡り、タボランに入った。山に部隊の経理部がなむろしているバライの前を抜け、急峻な坂道をより、稲畑をよぎり、山に隊の分哨の立っている台に東へさしかかったとき、スコールがやって来た。

予定以上も歩いているし、道連れの三人に風邪でも引かれれば大変だ。若干方角を左にとってバナナ林へ入っていった。山に部隊の某兵長に、この旨を連絡すると、このあたりから前方は危険性があるので十分に注意を払ってほしい。ということだった。かなり警戒しながら前進したが、それらしい影もなく、銃声も聞こえなかった。



ようやく辿りついたバナナ林の小屋へ入ると、半月前に中隊が分宿した際、残し置いたバナナやドリアンが芳香を放って完熟していた。これはありがたいとばかりに、それを鶏腹食ったが、日没後の蚊の襲来には全く閉口だった。

「ヨサッペなんか何だ 構うものか。」とばかりに、火を焚き、途には大胆さを増して、大火をこしらえ草をくぶしているうち次第に眠くなって来た。どこかの自動小銃の連続射が聞える。外被を被って火の傍に坐っているうちについには、深い眠りに陥ってしまった。

翌日は絶好の快晴に恵まれ、朝八時出発の三人は、

午後三時前には、もう桜盒地に到着したのである。

近辺に迫っているヨサッペの襲来に驚愕を感じていた三木たち残留者は、歓喜の涙を流さんばかりの様子でわたしたちを迎えたが、生田上等兵は、もはやこの世の人ではなかった。

残留者たちに、煙草や、バナナ畑での収穫物を分け与えたが、何かと事件の多かった、一別以来のことなどに話の花を咲かせているうち夜に入った。静かな夜だった。明朝への準備を完了したあと、わたしたち数人のグループは、頭を並べて、桜盒地最後の一夜をまどろむのであった。

二三　分散問題

朝が明け渡る。しのめの空を分けて射す日ざしが快い。八時に出発したものの、重症の松岡をかかえて

予想以上の難行軍であった。精神力、精神力と、肉的な気力を強要しての行程であったが、松岡も精魂のすべてを傾注しての移動であった。脈膊測定、二時間毎の皮下注射も怠らなかった。患者への配慮、そして、このグループの指揮者としての責めを負っての身心の苦悩も大変であった。

出発以来四日目の夕刻、目的を果たして力マリスクへ戻っていったわたしたちは、水牛の肉の特配があった。幾月振りの肉食だろう。この水牛は、敗亜の牧場へ夜間襲撃をかけ掠奪するもので、このためには度胸と機敏さを必要とするものであるのだ。

いずれにしても、近傍に食糧は豊富にあった。広大な畑にマイスが稔り、カモテカホイも育っていた。これらは敗亜（ヨサッペ）たちの耕作によるものであろう。そ

して、日本軍への反逆を意図し、根気よく長期戦に備えての生産物であったのだ。その彼等は日本軍に追いやられ、土地、作物を放棄して、カンラオンの山麓付近へ逃げ込んでいるのだ。しかし、我々日本軍は、刀折れ弾丸尽きて、いまや完全に、かくらヨサンへの反逆の機が円熟していると見るべきである。

かれらは、夜陰に乗じて我々の周囲をうかがっていた。一応、胃に膨満感を知るほどの食糧はあるにはあるが、わたしたちは蛋白質や脂肪分の補給心配しなければならなかった。すでに皮膚はさらさらと潤いを失い、体へ付着した垢は擦ってしまえなかった。食塩の欠乏も問題であった。発汗量の多い南の地方で塩分の補給なしでは暮らしていくことはできない。戦闘のさ中のことと て止むを得ないといえばそれまでだが、身体的な障害

を残していることは事実だった。兵隊はかなり視力の減退を訴えている。何を食っても覇気が盛り上って来ずなにか空しいものが全身に浮遊しているかの奇異な感じのする心理状態である。

そんな現状の中で、高千穂隊はじめ、あちこちの部隊では、十日乃至二十日の予定を樹て、多くの危険を冒し東海岸のサンカに又方面へまで、海水を汲みに出かけている者もいるらしい。必需品のマッチも殆んど使い果たされている。

将来へ展望の繋げない、うら悲しい沈滞が、言わず語らずの暗黙のなかで、隊員の心へしずかに拡まっていく。空襲が積極的になるにつれて、地上の敗亜の暗躍がそれへ呼応し、活潑化してくる。テロ事件がここかしこで行なわれ、カマリスクでも某中尉の暗殺が報ぜら

れている。兵隊が幾ら、下士官が幾ら、将校も殺害すれば懸賞の懸金をというふうに、我々日本軍の首には懸賞金がかけられているためだった。

まとまった少人数で別個に行動することが検討されるようになった。多人数の同居生活では何かと、不都合が生じてくるのだ。敵の感知を最小限に食い止める方策として、自活の途を選ぼうとする分散問題が矢釜しく叫ばれるようになったのは七月下旬に入っている頃であった。

その頃、ある午後の、いやに日射しの明るい日だった。下士官以上を集め、中隊長が、この分散問題についての諮問をしたのだ。

「各方面からの立場で、適宜判断をして、忌憚のない意見を出してくれ。たとえ大集団を離れても、これは離隊逃亡の罰則の該当は受けないんだ。」

中隊長も、ついに事ここに至ったのである。事実、他部隊では離隊逃亡の罪には科さないという条件付きで、すでに分散をさせているのが多くあった。しかし、この大テーマを掲げてわたしたちに意見を求める中隊長の心のうちを思うと流石に泣かされるのだ。

独立混成第三十一旅団第三工兵隊長として、内地港湾問司を出港した為本敏男中隊長は、すでに四分の三以上の部下を失ない、いま、こんな分散問題で、部下に意見を求めているのだ。しかし、これに関しての意見は十人十色。各分隊それぞれ兵隊の真情を把握しなくては、軽々に独断することは赦されるべきではない。結論の出ないまま、次機へ最終決定を残して流会した。

数日後、下士官、兵に、中隊長はこの問題を提出し

た。ただし、指揮班所属の兵士のみにではあったが、その解決を迫るのであった。否か、応か。しばや、わたしは迷わなかった。

心の中には、最初から、ただ一本の道が続いているのだった。わたし自身には伴侶を共にする下士官、兵、はいる。いざ分散となると、互いに肝胆相照らすほどの戦友同志、あるいは体力に自信をもつ者たちで三人、三人と中隊を離れていくのだ。そうすれば患者や体力の弱い者はどうするのだ。誰しも弱者に相対する者はいないだろう。弱肉強食の世界がここに現出するのだ。中隊長はどうなるだろう。徳大少尉が同道することになるうか。当番もついていくのだろうか。こんなことを想定するだけでも惨めだ。苛酷なフィナーレだ。共に苦しみ、悩み耐えて来た者同志だ。一体なんのために苦悩を重ねた月日の

連続だったのだろう。みんな一しょにいればいい。一しょに行動するのだ。生きても死んでも。わたしの決意は一条のともし火となって、ふかく先々、歩みゆく苦難の途を照らし出そうとしていた。

二四 アダルファスの花

結局、中隊残留者の意志統一がなされた。誰しもがわたしのように考えたようであった。この大問題も分散はしない方向で落着することになった。

なにとはなく物憂い数日の間に激しさをかえていた空襲も最高潮に達したようだ。友軍機は、全く見えないが、敵機はボーイング、グラマン、ノースアメリカとつぎつぎに寄せては返していく。高い空での輸送機の往来も数が増したようである。まず、十軒余が爆弾も、続いて力マリスクの南台地が叩かれ、北台地は敗

西に設置された。東方のバゴ河上流はコンソリー機に西の牧場付近はグラマンの銃撃によって洗礼された。実に惨々な目にあっていた。しばや残された地区はわたしたちの棲んでいる中央凹地だけになっているのだ。

夕陽が西に沈んで、そろそろ、危ぶしさが募るころ、指揮班のバライの前を通る数人の兵士たちか、しうこの辺が危険だ、気を付けろよ、などを話していたが、警戒を促す彼等の予告が的中する日が訪れてくるのだった。

翌朝、早い時刻から力マリスク一帯を偵察に来たい型観測機三機が入念に中央凹地を旋回した。ブルウンブルウンとグライダーのような低音で、低くわたしたちの棲んでいるバライの屋根を掠めては上昇していく。あたかも自動車でドライブでもしているかのような気易さで、三人の搭乗者たちは、右に左に顔を向け盛んに何か

話し合っているらしい。時おり腕を伸ばして指をさしている。こようすを指揮班のあばら屋から覗いていたわたしが、

「いまいましい奴らだ。田村、小銃で撃てる人だろう。殺してやれ。」と言ったが、田村は黙ったまま首をくしばって敵機を睨みつけているだけだった。

ブルーン ブルーンと、まるで小鳥でも翔んでいるかのような軽快さで、エンジンの音は午前中聞こえていた。午後に入ってからは、もう成すべき任務は完了したのか、一機もやって来なかった。ただ八つ頃、十三機編隊の重爆機が三組も東方さして飛んでいった。多分、レイテかミンダナオ方面へ行ったのであろう。

日が暮れると、いつも救われたような思いで、床下で青草を燃やし、蚊遣り火を焚くのが日課の一つにな

っていた。草を投げ込みながら、わたしは嫌な予感を思わないではいられなかった。抑えがたい予感を、そのまま中隊長に訴えるのだった。

「中隊長殿、明日は危いですよ。何とかしましょうよ。」

と、処置を迫ると、

「うん、あれほど綿密に調査していったからな。あしたは草原へ待避させよう。」

中隊長も胸中は穏かでなかったらしい。

一夜が明けた八月六日、美しいネグロス晴れの上空をグライダーのような、変な形のものが旋回していた。すでに中隊長の指示に従って、カマリスク草原に待避しているはずの分隊を追って、指揮班の人員も出発した。中隊長、長田軍曹、わたし、山口兵長、田村、赤瀬、小野各一等兵は、爆雷を逃れて歩を進めていた。草原にさし

かかった時、遥か遠空から異様な爆音がひびいてきた。

と、見やる山頂のその上に、朝の光を返えして、くっきりと浮かんでいる大編隊は四発機だった。

「あっ　コンソリーだ。」

見よ、あの堂々たる二十四機編隊は、お化けのように、白色透明にさえ見える機体を、得々と浮かべながら、こちらにやってくるのだ。

「しかし、軸線は大丈夫でしょう。」

わたしの声に、島本中尉は

「そうだ　少し左に振っているらしい。」

と応じる。やや安心してしばらく行くと、完熟したマイス畑の横へ出た。

けれども威圧的な編隊の軸線に全神経をとらわれているその時、いつ、どこから現われたのだろう。赤茶けた

観測機が我々の頭上に静止しているではないか。
「あっ、しまった。」
観測機は、更に恐るべき発煙筒を打ち上げたのだ。弾着地点を示された爆撃の大編隊は、左斜の軌線を三十度振り切り、わたしたちの真っ正面に向きを変えてしまった。
「走れっ。」
中隊長の怒号にわれわれ七名は従い、元来た草原を走りに走るのだった。
一刻一秒を争うこのときに、踏み分ける草原は深く繁りに繁っているのだ。仰ぐ空は紺青、発煙筒は、ひとひらの雲さえない頭上の空に、長く尾を曳いてくっきりと浮んでいる。編隊は進む二十四機。ときおり振り返って編隊を仰ぐわたしの視野へ、機体から離れて落ちる黒い礼のかたまりが入った。つづいて次々に落ちてくる。
「爆弾だ。山に、命のつづく限り逃げろ。」
直前を走っている山口を急かしてこう叫んだとき、ザアーザアーとスコールの降り注ぐかの騒めきが起こった。投下弾の空中擦過音だ。
「ふうだめだ。みんな伏せろっ。」
山口とわたしは同時に伏せた。地軸を裂くかの炸裂音と共に襲ってくる爆風で、全身が強く揺り動かされる。バラバラッと落下してくる破片と土塊。無念無想、二十三才八か月、あとの人生に見切りをつけ、全身を草に伏せていたわたしは、
「藤松軍曹、藤松軍曹」と呼ばれる中隊長の声を耳にした。しまった。誰かやられた。殺那、不吉な予感が背筋を走り、その衝動で立ち上ると、まっしぐらに声のあった

方角へ突っ走った。

中隊長の膝元で、隊長当番の田村が仆れていた。額へ皺を集め「痛い痛い」と唸っている田村の傍へ駈け込むと、田村は、

「痛い、焼けそうなです、痛い。」

と、苦悩の顔をしかめている。

「心配するな。俺が診てやる。」

彼の袴の紐を解き、下へまくり下げると、白い褌へ解血が散りにじんでいる。褌を除けると、青白く恥部が隆起していて見るからに痛ましい。押えてみると、創は浅く、堅い手ごたえがある。丹波栗の実位の破片が、そこに喰い入っているのだ。

「班長殿、そこなくが焼けそうなです。」

田村の繰り言へ、

「がんばれっ、男の泣く奴があるか、直してやるぞ。」

と、力一杯に叫んで勇気付けたが、あのコンソリーから落下した爆弾の、灼熱の破片に喰い込まれている田村であれば、痛がっても無理のないところだ。心配顔で、横から見ている中隊長が、

「大丈夫か」と聞くのに対して、

「大丈夫です」と、当人の手前、こたえはしたものの、実は気にかかることがひとつあった。

「しかし、ひどいな。」

「ええ。」

「助かるか。」

「はあ、命には別条ないと考えますが、部位がここだけに、尿道損傷うんぬんは、いまここで断言できませんがかなり可能性を心配せねばなりません。」

田村は、なおも顔を引きつらせて苦しげだ。
「どうするか。」
せっかちな中隊長に
「とにかく摘出(てきしゅつ)はしてみますが、兵舎へ帰らねば駄目です。」
こう答えたとき、またも轟き渡る音波、
「重爆です。」
「そうらしい。」
「田村はどうする。」
「どうしましょう。」
「この場へ残そう。」
「かに術(て)がない。」
事実そうである。止むを得ない。あたりの木の枝や草葉で田村を偽装し、立ち上がりざま空を仰いだ。

宮本偽故
徳島市　出身

こんども重爆だ。十二機の編隊は四十八のエンジンをとどろかせ威丈高(たけだか)に突き進んでくる。轟々と野を裂(さ)き、谷を崩し山をも削(けず)らんばかりの凄(すざま)しい音響である。
「また軸線だ。あっちへ行こう。」と怒鳴(どな)り散らした中隊長が右手を上げた。その指先はマイス畑をさしている。
わたしたちが一目散でマイス畑へ駈けつけたとき、右手から誰かが駈けつけてくる。誰だろう。あつ、宮本軍曹だ。息せき切って宮本軍曹は、中隊長の腕を握り、
「こっちは軸線です。」
と、叫ぶのだった。中隊長は目をくりむき、大きく頭を振りながら、
「軸線はあっちだ。」と怒鳴る
「いいえ、こっちです。」
「いや あっちだ。」と争っているまに、鷹の編隊

いまわれわれの頭上に近づきつつある。憤むべき敵の空軍主力B二十九が。一秒一刻、頭上へ迫った十三機編隊は、いままさに軸線上に位置しているのだ。

編隊の高度は高い。もう何處へ逃げようとしても、どんなに走りあがこうとも、やはり軸線に入っているのだ。

「よし、死んでもいい。運命だ。この足が踏みしめている位置から、ただの一歩だに動きはしないぞ。」

わたしは、はっきりと覚悟を決めた。厳粛な死に直面して、かつて空めた死生観よろしく、云々とさえ云った大空を仰ぎ見る。もし、いまあの編隊から異様な影のように黒ずんだものが流れ落ちてくれば死ぬのだ。一片の肉塊さえ残さず、木っ葉微塵に砕け散るのだ。わたしは不動の姿勢をとった。

瞑目したわたしは両手を堅く握りしめている。一秒、二秒、三秒、四秒、五秒、六秒と、死を待っている心の中は苦悩も歓喜もない。平静と冷静を保っている自分自身なのだ。そして耳をつんざく爆音の轟き以外は、俄雨のような摩擦音も耳に入って来ないばかりか、何の変化も起こってこない。

パッと眼を開いて静かに空を仰いだ。と、編隊は頭上を過ぎて飛翔を続けているのだ。危機は去った。たしかに生きている。わたしたちは、強烈な決意からくる全身の硬直を解いて、そのあとにくる一抹の寂しさと、喜びの混り合った顔を見合って、いいようもない大い溜め息をつくのだった。

、應の四発音の響きが消え去ったあとは、いましがた、ほんの直前の心理的経過が嘘でもあったかのように、

ネグロス晴れの、一片の雲さえ入れない大空を戴って、雄大なカンラオンが流え、黄金のマイス畑と、深い緑の草原とが果てしなく拡がっているのだった。

田村を護送して兵舎へ引き上げて行ったが、この時の被害者は、田村ひとりではなかった。松崎一等兵の軽傷と、小西軍曹、黒石一等兵、田中一等兵の重傷患者が発生していた。特に田中の負傷は致命傷を受けていた。わたしの手元には、こんな患者を處置する器械、薬物などは、とっくの昔に尽き果てていたのだ。

まず、手近な指揮班の田村から手当てにとりかかった。局部の剃毛は普用な小野一等兵がやってくれた。しかし切開するにも麻酔薬もないのだ。

「田村、我慢するんだぞ。」

と、いきなり田村の肉を切った。創面に脱脂綿が当

てられ、鑷子がその創口に深く喰い入る。ガシャッと金属性の音があって手ごたえがする。しかし抵抗はかなり強い。少し頭を張るんだと怒鳴りさま、鑷子を握る手に力をこめ手前に引くと、田村は全身をぴくつかせて苦しんだ。破片は固く焼けつき、組織へ完全に密着している。もう一度、力をこめて試み、やっとと思いで摘出した。田村にそれを見せたが、それは丹波栗の実大のものだった。瓦斯壊疽の併発をおそれて、入念に消毒し、繃帯にとりかかったが、尿道は傷ついているようだった。

小西軍曹の小屋に入ると、右大腿骨に爆弾破片創を受け、左足背にも創を受けていた。

「藤松よ、俺の将来がおもしろくないようだったら、あっさり言ってくれ、皆に迷惑をかけるのは嫌だから、自決するつもりだ。」

と言う声は、今まで精悍そのものであった小西

軍曹の言葉とは思えなかった。わたしには「何も言えなかった。すでに彼の右大腿には、瓦斯壊疽の徴候が見えはじめていた。

植田分隊の田中を訪れるとき、特に重傷と聞いていただけに、わたしの心は冷静を欠いていた。田中は、生来の蒼白な顔面を一層青白くして、倉皿に喘いでいた。右下腿は腓腸両骨は複雑に砕けていた。

「田中、苦しいか。」

彼の右手を握ると、脈膊は乱小、そしてか細かった。

「班長殿、苦しい。」

そう訴える萬治に、「おおそうだろうとも」と、心を寄せるのであったが、彼以上に、わたしもつらかった。

この重症にしてこの倉皿、じっと見詰める萬治の窶に幾つかの皺がかきよせられ、苦悩のほどを思い知らされるわたしであった。

彼の心臓部に手をふれて、田中を救いたいと切実に願ったところで何の支えになろう。切断し出来ない、輸血用看具とて持ち合わせがないのだ。何の迂しにもならない手当てを施して、田中の傍らに坐るわたしの心中は悲壮めいたものを帯びていた。

明日の命、いや、一分の後の自分の生命さえ保証できぬ激しい闘い、そのここ一年が、まるで十年の年月のようにも思われてくる。

緑の草原を走るにコモーション(機関車)に身を乗せていったマタパンでの田中との出逢い、サラビア、バコロド、そして二本柳までの想い出、勝天神、桜倉地での面会等など、すべて過去の想い出となった一連の事象が、こもごもに胸の中に去来し、わたしは心の疼く思

いかする。

萬治の声を、もう一度この耳に聴きたい。彼の腕にもう一度注射針を刺した。しかし彼になし得るわたしの最善の行為でしかなかった。しだいに暮り乱れる思いを制御し得ず、

「田中、俺だ、萬治、わかるか。」

と、耳元で叫ぶ声もうるんでいた。と、切れ長の細い眼をわずかに開いて、声のありかを探し当てた田中の答えな顔に、かすかな喜びの色が漂い、そして唇が動いた。

「班長……」

と、洩れるその言葉。

「おお、萬治、わかったか。」

と、あせぶわたしの声、しかし、萬治には、もう言葉が続けられなかった。そしてわたしもそうであった。

感応的な了解で、互いの心を結びつけて、死生苦楽の夜、田中萬治は、昭和二十年八月六日十六時四十分、心優しい数人の戦友にみとられながら、もはや帰らぬ旅の人となってしまった。

萬治の死は、さすがに心強く空虚な時のうつろいの中に呆然となるばかりであった。胸の上に組み合わされた萬治の両の掌に嗚咽を伴なってわたしの涙をとめどもなく降りかかった。

その翌日、渡辺一等兵、近藤一等兵に指示して、田中の遺体を葬って貰ったが、その日は一日中放心状態であった。

やがて、夜のとばりがおろされた。上弦の月がやや斜に光っていた。

故陸軍兵長、田中萬治之墓と墨痕鮮やかに

したためられた墓標が光りの中に浮き立って見えた。いつともなしにこの墓の斜面へ来て立ちすくんでいるわたしの足元で、南国の花 アダルファスがそよ風に揺れている。

胸の中に、なお生きている萬治は、この胸の中で、わたしに何かを求めているようだ。

「田中、萬治、詩を聞かせようか。」

地下に眠っている萬治も、「うん、班長」と、こたえているようだ。

「いいか Karl(カール) Busse(ブッセ)の 山のかなただ。

Überden Bergen, welt zu wandern,
sagen die Leute, wohnt das Glück.
Ach, und ich ging im Schwarme de
Andern kam mit verweinten Augen zurück

小田久義　20.4.14 笠置山にて赤痢罹患 4.24 F.Lにて死亡
大地福市　徳島、美馬郡穴吹町古宮
小原栄次郎　20.5.5 東太郎山にて受傷 ネグロス島FLにて 5.15 恩籍に入る
池田昌稔　愛媛、北宇和三島村広見出身
20.5.15 右肩頭穿透性砲弾破片創 5.20 そこにて死亡
池田賢二　徳島那賀郡羽ノ浦町出身
テクタ-11　20.5.20 笠置山にて左肩甲下部盲貫爆弾破片創にて死す
池本和躬

Überden Bergen, weit weit drüben,
sagen die Leute, wohnt das Glück……
山のあなたの空遠く
さいわい住むと人の言う。
ああ、われ 人と尋め行きて
涙さしぐみ かえり来ぬ。
山の あなたの なお遠く
さいわい 住むと人の言う……

わたしの声は、月を返して輝やく広々(こうこう)とした草原斜面の夜露に濡れて、悲しく遠くひびき渡り、ついにはカンラオンの彼方へ消え入ってしまうのだった。

二五 国崩る

その翌日、八月七日、小西信一軍曹も瓦斯壊疽(ガスえそ)を併発して死んでしまった。黒石の治癒も見込みが立たず

田中萬次　愛媛、越智郡菊間町本通り（静子夫人）
カマリスクにて全身爆創で20.8.6. 死去
黒石光雄　20.8.6 カマリスク　右胸部 臍部貫通爆弾破片創にて
隊治療中 20.8.15 死す。
小西信一　20.8.6. カマリスク　右趙爆弾破片創（瓦斯えそ併発）受傷
20.8.7. 死去す。
松岡正喜

ごく軽傷だった松崎も、ひどい脚気兼栄養失調のため手当てを施しても好転しなかった。もはや人体自然の良能が失なわれていたのである。

隊長当番の田村は尿道損傷を受けていた。尿量増加による膀胱（ぼうこう）の充満は、創へ激痛をもたらす原因を作った。創口へ尿が滅れにじむためである。苦しみを見るに見かねても何ともならない。陰茎へ通して膀胱の尿を導くためには尿道カテーテルが必要だ。しかしそれをわたしが持っているはずがない。結極中隊長と協議の上、患者田村を山口部隊の軍医に頼むことにした。山口部隊の現在地大川下流への輸送は一大難事である。途中には、大谷の絶壁があり、凹地のひどい泥濘（ぬかるみ）区域がある。山と谷と嗤み合う地形が長く続いているからだ。患者にも輸送者にも苦難

田村美一　愛媛、温泉郡中島町 畑里
20.8.6. カマリスクにて 耿部盲貫爆弾破片創 尿道損傷。
竹本竜松　松山市三津浜町 堀内
富田房善　福岡県中間市 大根土高見 4組
高田勝一　徳島 板野郡 吉野町一条出身
渡辺勝安　愛媛 西宇和郡 町見村 大町
宇部市へ移住。

※purgatory

を耐え乗り切ってもらわねばならない煉獄※があるのだ。カトリックの教えで死者の霊魂が罪の償いを果たすため浄化される場所を指していうのが煉獄なのだ。大罪人は地獄にゆくが、小罪や大罪を犯（おか）しても赦（ゆる）された霊魂は、罰の苦しみを受けて清められ、天国に行くことが出来るようになると説（と）いているのだ。ふっと、ダンテの詩を憶って、人間は心を統御するのに、巧みな口実を思い付くものだとも考える。

中隊残留者中　たしかな体力の持ち主と評価される下村伍長、山中、曽根、鈴木各上等兵、藤川、杉村、渡辺各一等兵　以上八名をもって輸送者に任じ、西川、近藤を付き添い勤務者とした。田村の輸送に、涙ぐましい責任感と戦友愛が発揮されなかったら、おそらくこの挙（きょ）は成功を収め得なかったであろう。

堀内正嗣

※ Leaflet.

夕方近く、大川下流で田村を依頼したわたしたちは、川の畔で一泊した。その夜、山口部隊の分哨へ連絡なしに大火を焚いて暖をとったため、部隊の指揮班長から凄く叱言を聞かされたが、致し方のないことだった。

翌朝、八名を伴っての帰途、小哨の海老原軍曹に出会った。まだ昨夜の一件で憤慨しているようだった。

「そう怒りなさんな。また水牛でも撃ちに連れて行かせるから。」

などと冗談に紛らせ談笑したことであったが、この一件は、さすがの山口部隊をまごつかせたようである。

やがて台地を下ったわたしたちが、大川上流で水浴しその川畔でしばしの休息をとっていると、高千穂航空隊の将校が通りかかった。見れば軍医である。この時わたしは、「無条件降伏」に関わる宣伝ビラ※(リーフレット)

山崎 哲弘　高知 吾美郡 夜須町 手結
吉兼 昌三郎　徳島 板野郡 御所村
山口 正八　西ネグロス州 カマリスク付近にて受傷 20.8.10.
山口 嘉次郎　徳島 阿波郡 市場町

について話を聞かされたのである。また、山口部隊の経理付き伊本軍曹と篠原一等兵との複雑な事故についても話し合ったが、休息中の輸送隊の群れへ入っていった。そのわたしを囲んで、祖国の無条件降伏の真相を彼等は問いただすのであった。

「いつわりと思いたい。が、これは真実であろう。いや間違いあるまい。日本軍は知っての通り抗戦もできない。日本内地でも引きつけ戦法も度が過ぎて、ひどく爆撃を受けているそうだ。いくら大言壮語しても、十軒家とかカマリスクのように撃ち込まれりや、精神力だけでは抵抗は出来ない。優秀な兵器や物量の前には人間なんか小さいからな。天竜川へ撃ち込んで来た機銃掃射の薬夾の刻印が一九三八と打たれていたんだ奴さんら、いま七年前の弾丸をこめているんだぞ。」

無念さも噛み殺しながら、わたしはそう言った。
カマリスクへ帰ると、中隊長この導で持ち切りだった。中隊長は、頑として、これは偽わりの宣伝びらだと主張してゆずらなかった。ついにわたしたちは、ぎりぎりの所まで追い込まれてしまったのだ。将校、下士官、兵士は、「一体、自分たちは今後どうなるだろうか。」の問題を解明しなかった。
「現長殿、今後、自分たちはどうしたらいいでしょう。不安な兵隊たちは、夕闇も厭いなく疑惑を解こうとするのだ。
「そうだな。これが事実とすると、全面的無条件降伏だから、一応どこかの連合軍管下の収容所へ入らねばならないだろう。プリゾナーオブワーだ。つまり戦争の捕虜(ほりょ)つまり※POWだよ。しかし俺は自決

※ Prisoner of war.
P. O. W.

※兵団長 河野 毅 中将
昭22年4月22日 絞首刑に処せらる
合掌.

しようかとも考えている。」
「かとも とわ どういうことですか。」
「いや、少し考えたいこともあるので、※兵団の河野閣下の指示を待つんだ。それによって中隊長から命令が出されよう。中隊長の命令は違わないようにしてみんなで統一行動をとりたいな。みんなしいかい。しかし悲劇だなあ。」
「捕虜になれば縛り首だといってましたよ。それとも濠州ですか。」
「いいじゃないか。縛なら カリフォルニアだ、アメリカが見られて、オーストラリアだと、さしあたり鉱山掘りかな。しかし、どんな処置でどんな待遇かはじめてだから想像がつかんじゃないか。中隊長だって俺が言うように言うかなあ。」

兵隊たちは、誰しが腑におちないような顔をして、引き揚げていった。

間もなく前方に敗走が出没しており、やがて攻撃をかけてくるかも知れないという情報が入った。兵器も弾薬もなし、いまになってヨサッペに殺される愚の骨頂だ。といっても三八式やイ式銃では、とても問題にならない。相手は自動小銃を持っている。三十六計逃げるに如かずだ。わたしたちは、大谷伍長に従って、ついに十軒家のあたりまで逃れて行った。

あたりに、一週間前位まで、十軒のバライ屋が立ち並んでいた。「十軒家」の名称はそこから名付けられていたのだが数日前の重爆機による爆撃で、影も形も止めていなかった。奥まった山間の谷合いの草むらに入ると、草葺きの無人小屋が一つだけ残されていた。そこに入って、そ

のおまけに毛布を貰った。途中で傷いた右足背の創痛に堪えられず、思い余って褌を裂いて手当てをしていると、軽機関銃の連続点射が直近に聞こえ、小気味の悪い淋しさが募ってくる。

「兵団まで連絡をとりに行ってくる」

と言って、当番の山崎上等兵を連れて、徳久少尉が出かけたが、なかなか帰って来ない。

もう美しい月が出ている。けれども、わたしには、わたし自身の心を纏め上げることができない。自分に自信を失い、自分そのものがわからなくなっているのだ。

「なぜ自分は此所まで逃げ落ちて来たのだろう。野戦病院当時から、敵弾を避けての壕入りを拒絶し続けたのだろう。ヨサッペへの踏み殺しになるのもいやだ。ヒリッピン ネグロス島の土民と化して、この地の奥深くに

天上天下唯我独尊の農民生活でも送ろうか。などと考えたりしていると、徳久少尉があたふたと帰って来た。

「おい、本当じゃあ。」

「えっ」

「八月十五日、無条件降伏」

「えっ、無条件……」

「そうじゃあ 条件なしぢや」

「で、友軍、日本軍人はどうなるんです！」

「兵団からの指示は どうですか。」

まるで、たたみかけるわたしであったが、その後のことは、適時に兵団側から指示があるそうじゃ。」と言ったきり背を向けてしまった。

わたしも、そのあと、何も言えないし、聞きたくもなかった。割り切れない心のまま、じっと月を仰ぐと、

月が光っている。祖国の人たちも、同じこの月を眺めているだろうか。月も地球も、太陽も丸いのに、なぜ人間だけが醜い闘争を繰り返しているのだろう。

祖国は破れた。日本が崩れたのだ。犠牲者はどうなる。

後よ、中島よ。小泉、黒田、田中よ。そして数千、数万の犠牲者たちよ。その霊は何によって慰さめられ 何によって安けさを得るだろう。わたしたちの苦難の数々は何のための犠牲(けにえ)として受け入れられるであろうか。数限りなく死んでいった多くの戦友たち、太郎山で、天神山で、そして地獄谷で、あの壘々(るいるい)と築き上げられた屍の霊魂たち。か、しかし、やがて来たるべき将来には、最高の価値ある犠牲として評価され、そして、わたしによって、いや祖国の人々によって、無上の価値をその上に築き上げられる礎(いしずえ)として、語り継がれることであろ

う。そうされなければならないのだ。

谷間の木立ちは、かなり明るいが、わたしの心はまだ閉(とぢ)されたままであった。月は依然明るく冴えている。月を仰いでいるわたしの両手は、堅く堅く握られている。止(と)め度(ど)なく落ちる涙は頬(ほお)を伝い草の葉に振りかかる。わたしは、誰もいない草原のさ中へ、どんどん入っていった。

国崩る悲しき夕(ゆうべ)草原に
草刈りおれば月上(のぼ)り見ゆ。

二六 その のち

無条件降伏についてのリーフレットを見た兵団長は、その真偽真相を確認すべき義務を課せられている。憲兵隊一箇分隊に山下兵長を通訳として付し、バコロド市の連合軍バコロド拠点へ派遣した。しかし

その途中で、彼等は敗匪たちによって捕えられ、丸裸にされて袋叩きにされていたと聞く。そこへ通りかかった巡警隊員(警官)が、現場を目撃し、事情を聞き、直ちに、本部へ誘導してくれた模様である。

一行は立派な待遇を受け、被服、糧抹(まつ)、ラジオ等を貰い受け、戻って来たのであった。

果たして降伏終戦は正真正銘、偽りなき事実として確認されることとなった。直ちに高級参謀渡辺中佐を軍使としてバコロドに派遣し、今後の日本軍人の処置待遇、投降日時およびその場所、服装、所持品等々の協約を結び遂に兵団長命令の伝達となる。

八月二十六日、命令受領者の持ち帰った命令、会報、指示は事こまかに

兵団は前面の米軍に投降せんとす。……云々より始ま

り、その日時、場所ならびに建制順序、自決禁止に至る細心の注意を払った長文の礼のであった。

こうして、ネグロス島、西ネグロス地域における日本軍人ならびに軍属は昭和二十年八月三十日にバコロド市に開設されたバコロド収容所に辿り到ったのである。

下巻（完）